

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 170

特集 サセル・カンリ二峰初登頂



1986 JANUARY

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

〈特別企画〉

中国の秘境「九寨沟」「黄龍寺溪谷」の旅

— 四川省・岷山山脈麓トレッキング —

「九寨沟」「黄龍寺溪谷」は、四川省北部に、甘肅省との境を成す岷山山脈の麓にある、中国でも第一級の景勝地です。無数に存在する真青な湖と真白な滝が美しい調和を見せる「九寨沟」、水の流れが長い年月をかけて造りだした自然の芸術品「黄龍寺溪谷」は、これまで外国人には未開放の地でしたが、86年にH A Jのために特別開放されることになりました。トレッキングの基地となる町「松藩」の歴史は古く、春秋時代に溯ると言われています。歴史的にも興味のあるところです。

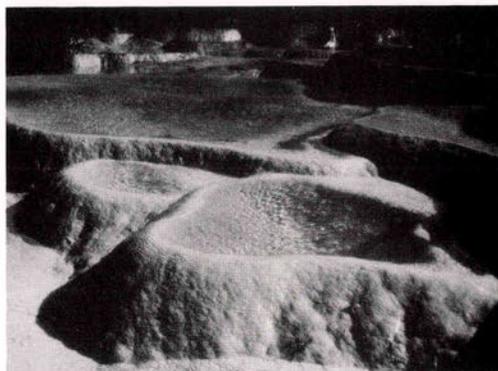


▲九寨沟の滝

1. 時期 1986年7月25日(金)～8月10日(日)17日間
2. 定員 15名
3. 費用 約70万円
4. 行動概要 北京 — 成都 — 松藩

トレッキングは、松藩を基地として九寨沟黄龍寺溪谷へ、それぞれ往復2～3日の行程です。四川省登山協会、松藩体育委員会のメンバーとの親睦会も予定しています。

北京—成都間は、往路あるいは復路に鉄道の旅を予定しています。



▲黄龍寺、自然の芸術品

表紙写真

Pinchimik の村から困難な荷揚げを続け、ベース・キャンプをサカン氷河の奥に建設し、そこから更に気の遠くなるようなモレーンの丘を登り下りし、第1キャンプに近づく。その途中から右手に見えるサセル・カンリ2峰は、私にとってまさに憧憬の山であった。(沖 允人)

ヒマラヤ No.170

1. サセル・カンリ2峰(西峰)初登頂 1985年東部カラコルム日印合同隊
19. ヒマラヤ・ニュース <地域ニュース・インフォメーション>
22. 秘峰ギャラ・ペリ偵察 山森欣一
28. 寸感・事務局日誌

インド領・東部カラコルム

サセル・カンリ2峰(西峰) 初登頂

はじめに

インドの北西部の山岳地帯は、一般に、東部カラコルム地域と呼ばれ、カラコルムの主脈を根幹とし、7,000 mを超える重畳とした山々から成りたっている。これらの山々は、万年雪で覆われ、その雪は氷河となって谷々を埋め尽くしている。

東部カラコルム地域の自然は厳しい。しかし、美しい景観が故に古来から注目され、多くの探検家や登山家の活躍の場となり、チベット高原からインドへ出る要路でもあった。近年では、東部カラコルム地域がインド・中国・パキスタンのそれぞれの国境地帯であることから、幾多の国境紛争の勃発した地として知られている。

インド政府は、東部カラコルム地域の豊かな自然の平和的な利用を考えており、この地域に先遣的に極少数の登山者を入域させ、文化的な活動を行わせることを計画した。そして、厳選されたインド人と外国人とによる合同の登山隊をこの地域に派遣することを決定した。1985年東部カラコルム日印合同登山隊は、このような経緯と意図によって、インド側は、インド登山財団(IMF)、日本側は、日本ヒマラヤ協会(HAJ)によって組織されたものである。

幸に、私達は、サセル・カンリ2峰(Saser Kangri-2)の西峰(仮称)(約7,518m)に初登頂することができた。ここに、帰国速報として、登

▲ Saser Kangri-3 (left) and Saser Kangri-2 (right)
サセル・カンリ3峰とサセル・カンリ2峰(西峰)(O)

山の概要を報告し、関係各位への深甚なる謝意としたい。

計画の概要

目的：Saser Kangri-2(7,518 m)の初登頂

隊の名称：

1985年東部カラコルム日印合同登山隊
Indo-Japanese Joint East Karakoram
Expedition 1985 略称：(I)JKE'85)

主催：日本側 日本ヒマラヤ協会(HAJ)

The Himalayan Association of Japan
インド側 インド登山財団(IMF)
Indian Mountaineering Foundation

隊の構成：隊員 合計18名

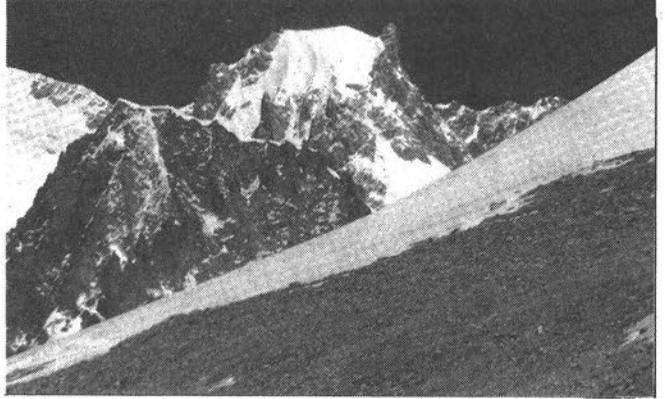
日本側 沖 允人(隊長)、岡本正人(登攀隊長)
安藤忠夫、徳島和男、峯本 枢

インド側 Hukam Singh(隊長)、
C.R.Pattanayak(医師)、Phu Dorjee(登攀隊長)、Chait Singh Kutiyal、
Neema Dorjee、Sonam Wangdus、
Sherap Chholdon、Tshering Smanla、
Prahlad Singh、C.K.Tyagi、
〔故〕Tshering Angchok、Piar Singh、
Daulat Ram(無線技師)、

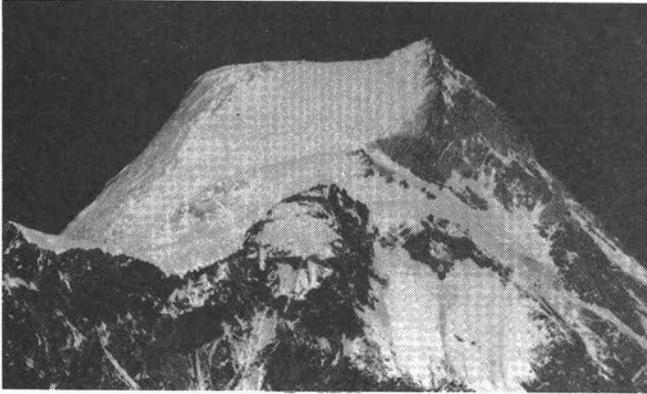
リエゾン・オフィサー：Ljajullah Ansari Zakaria

期間：1985年7月14日～9月25日

秘峰の山群

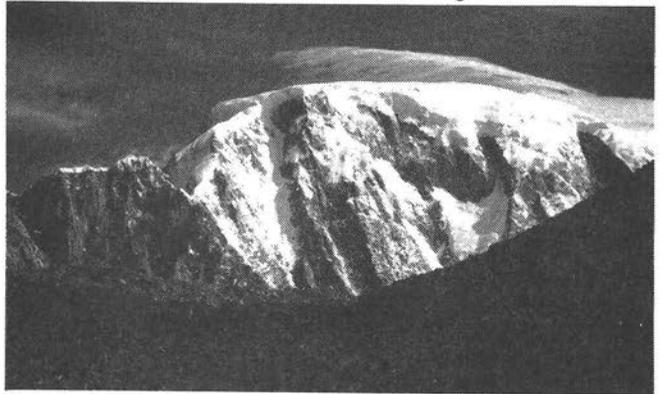


▲サセル・カンリ 2 峰 (西峰) (O)
Saser Kangri-2 (West)
(C7,518m) from ABC

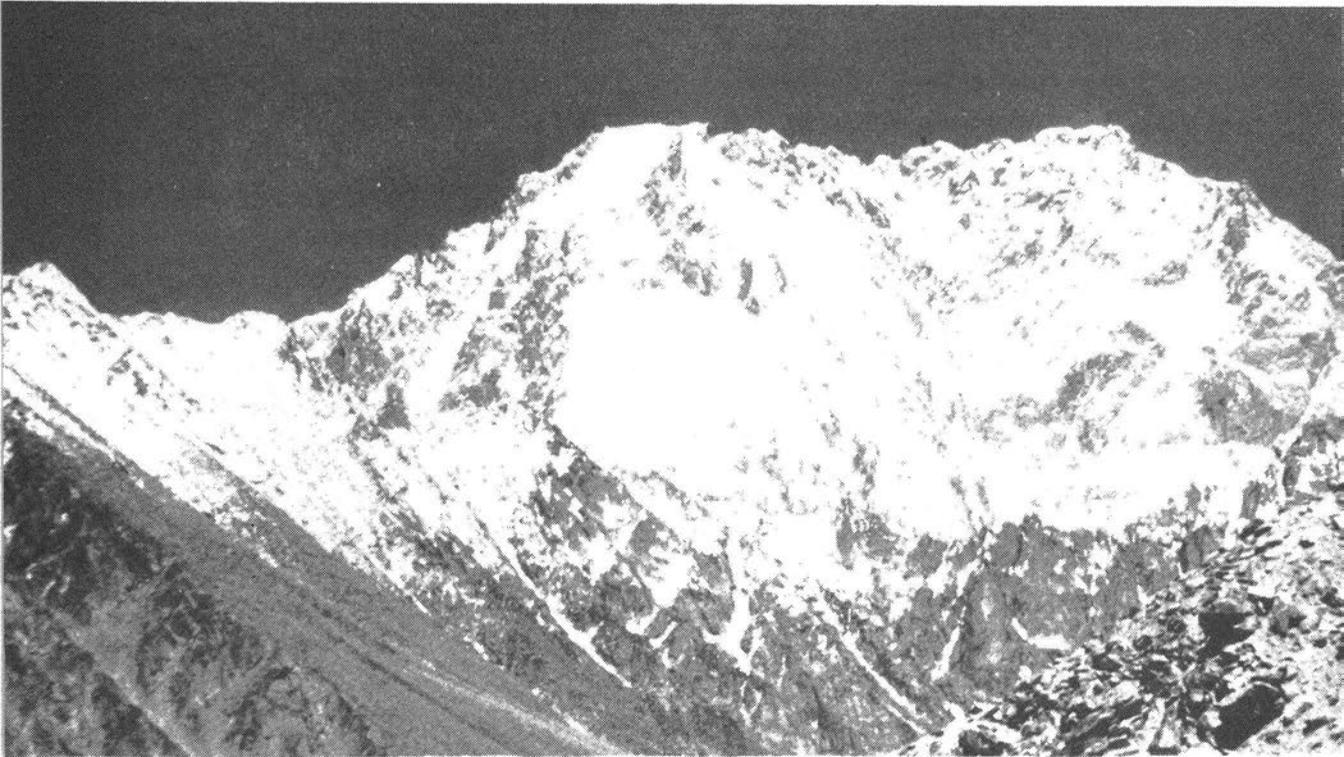


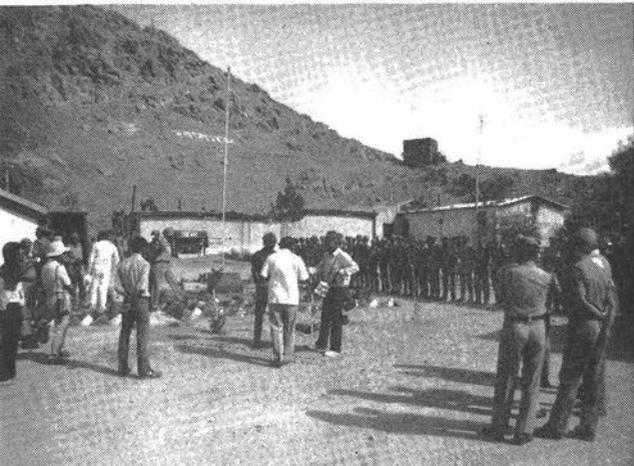
▲サセル・カンリ 3 峰 (O)
Saser Kangri-3 (7,495m)

サセル・カンリ 4 峰 (O)
▼Saser Kangri-4 (7,310m)



サセル・カンリ 2 峰 (西峰と東峰)
Saser Kangri-2 West (C.7,518m)
▼ and East (7,518m)

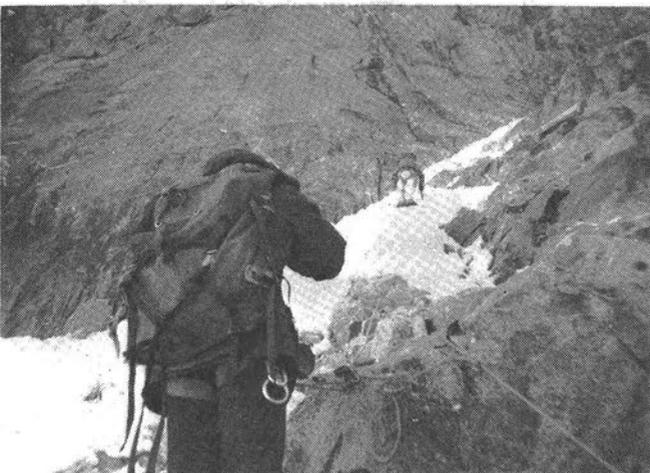




▲ The party started at Leh ITBP HQ
for Nubra Vally
レーのインド国境警察隊の基地を出発する登山隊(M)



▲ Khardnng La (5,486m), the highest motor
road in the world.
カルドン・ラ、世界最高の山岳道路(O)



▲ Climbing a gully towards C3
第3キャンプへ向かってガリーを登る(S)



▲ Viewing a gully from C2
第2キャンプからガリーを望む(O)



▲ Climbing icy wall between C4 and summit
第4キャンプと頂上間の氷壁を登る(S)

登山概要

沖 允 人

7月14日に日本側隊員4人は成田を出発し、New Delhi、Srinagar を経て、インド北部の登山基地、Lehの街に着き、インド側隊長 Hukam Singh (インド・チベット国境警察隊 (ITBP) 司令官)、および、インド側隊員12人と合流し、この街を8月3日に出発した。日本側隊員は当初の計画から1人が参加できなくなり5人となった。

途中、世界で一番高い山岳道路の峠、Khaldung La (5,486 m) を越え、Saser Kangri 山群の西側の山麓の村 Pinchmik に着き、そこから3日行程の距離にある Sakang 氷河の末端に、8月6日、先発隊がベース・キャンプ (BC) (4,800 m) を選定した。8月14日、本隊が BC に集結し、本格的な登山活動を開始した。

山麓の村から BC までのルートは、途中、標高約 4,500 m の岩稜を越える悪路で、しかも、2日間は水が一滴も得られないという困難なものであった。BC を建設後、数日の偵察を行った後、Sakang 氷河をつめ、Saser Kangri-2 と Saser Kangri-3 を結ぶ岩稜上に達し、そこから Saser Kangri-2 から北西にのびる尾根を登山ルートとすることに決定した。

BC から氷河をつめ、氷河のモレインの上にアドバンス・ベース・キャンプ (ABC) (5,400 m)、第1キャンプ (C1) (5,700 m) を建設し、Saser Kangri-2 と Saser Kangri-3 を結ぶ岩稜基部に第2キャンプ (C2) (5,900 m)、そこから垂直に近い、岩と氷の壁を約 500 m 登ったところに8月24日、第3キャンプ (C3) (6,450 m) を建設、さらに、8月27日に最終キャンプの第4キャンプ (C4) (6,650 m) を建設した。C3 が建設された数日後、日本側の沖隊長と安藤の2人は、計画が約半月あまり遅れたため、休暇の日数が不足し、やむなく下山した。この結果、日本側隊員は、岡本登攀隊長、徳島、峯本となった。

C4 建設の3日後の8月30日、C2 から C3 へ荷揚げをした後、C2 へ下山中、インド側隊員の Angchock が、落としたゴーグルを拾おうとしたとき、あやまって約 400 m 転落し、即死した。

この事故の後、C1 で残りの全隊員がその後の隊の行動を協議した結果、この悲劇を乗り越えて、なおも登頂に向って進むことになった。

山は9月に入って風が強く、天候も悪い日が多く、寒さも厳しくなっていた。

9月4日、インド側隊員6人、日本側隊員の徳島、峯本の2人が第1次アタック隊として頂上に向ったが、深雪のため、頂上直下約 300 m まで達したところで引き返した。

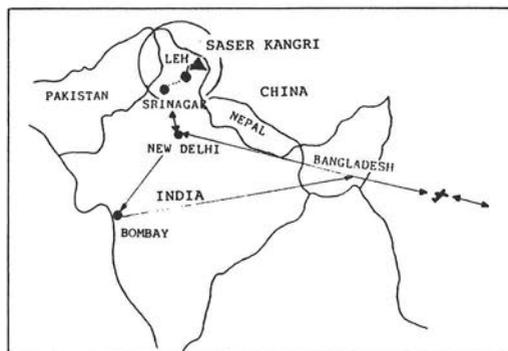
9月5日、インド側隊員6人と岡本登攀隊長は頂上に向ったが、頂上まであと約 300 m のところで悪天候のため、またも、登頂を断念した。

9月7日、最後のチャンスとして、インド側隊員5人と岡本登攀隊長は、午前6時に C4 を出発し、頂上へ向った。雪壁を登り、深雪と寒さを克服し、午後5時30分、Phu Dorjee、Wangdus、Chholdon、Smanla の4人が Saser Kangri-2 の西峰 (約 7,518 m) 頂上に立つことができた。Prahlaad Singh と岡本登攀隊長は体調が悪く途中で登頂を断念した。

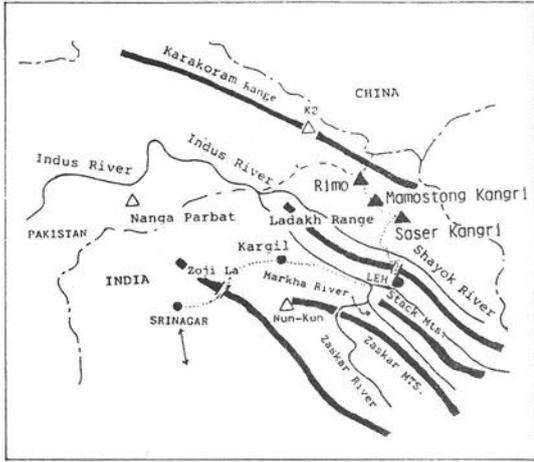
登頂後の下山は困難を極め、C4 に帰着したのは午後11時10分であった。

9月18日、仕事で登山隊を一時離れていた沖隊長が、再び、London から New Delhi に帰着し、登山隊に合流した。

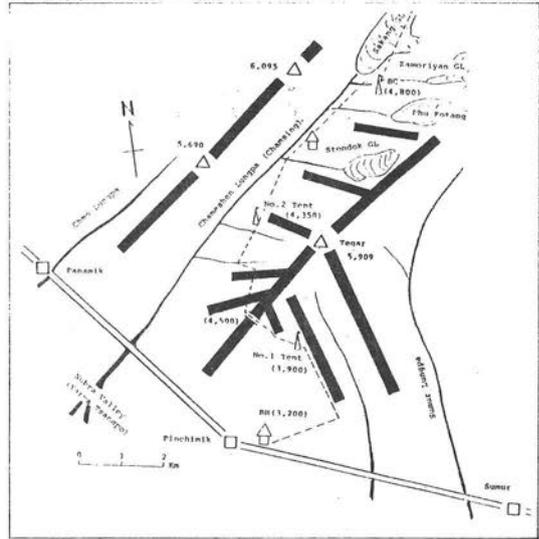
9月23日、New Delhi で、Rajiv Gandhi 首相に登頂報告を行った後、登山隊を解散し、沖隊長、岡本登攀隊長、徳島は9月25日に帰国した。峯本は、ガンゴトリ方面の探査を行ったのち、11月3日に帰国した。



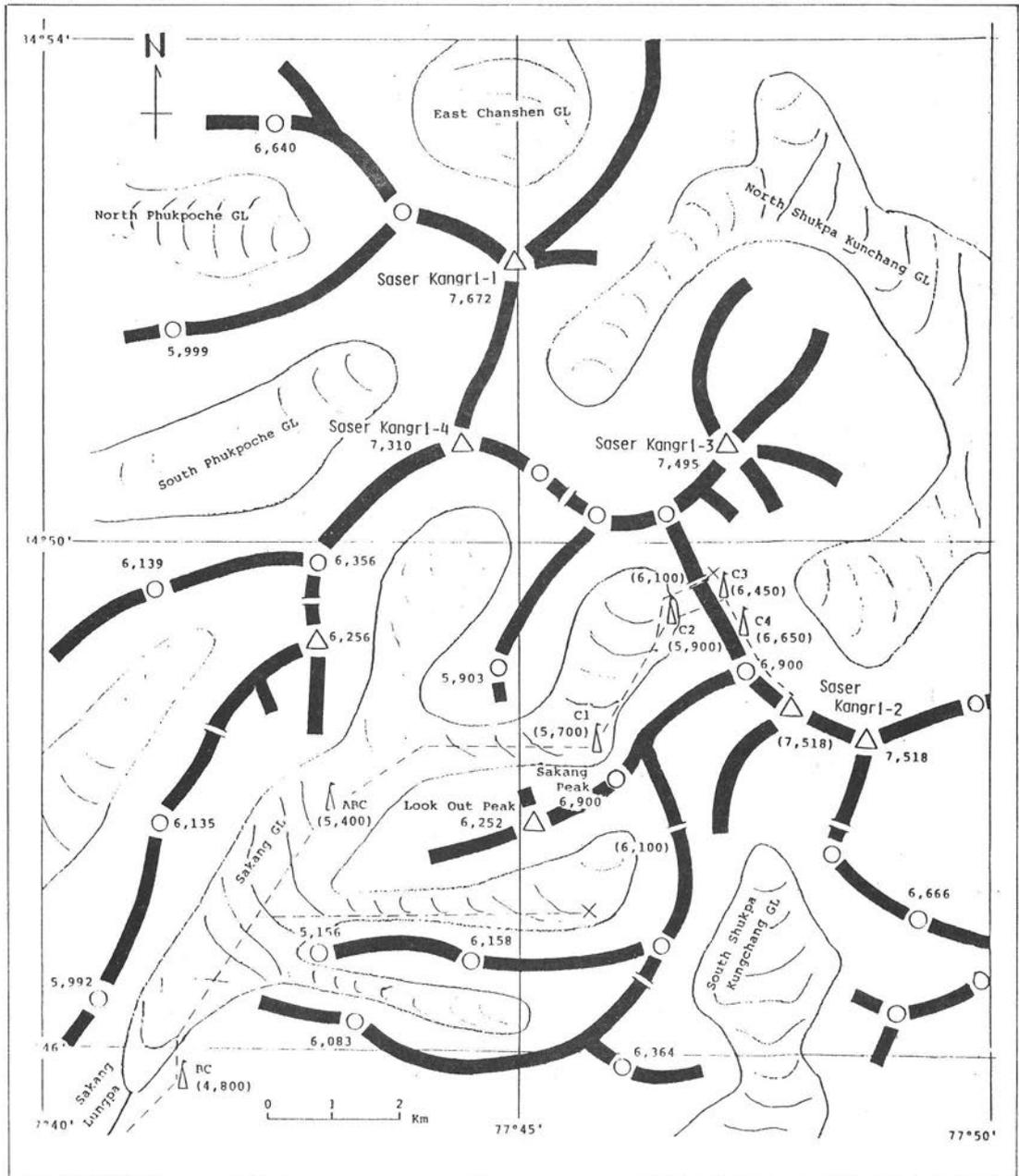
東部カラコルム地域概念図



Approach Route



Saser Kangri Mountains



第1次アタック

徳島 和男

9月3日、第1次アタック隊として、インド側隊員、Smanla、Prahlad Singh、Chait Singh、Chholdon、Phu Dorjee、Wangdus、日本側隊員、峯本、徳島がC1よりC4に入った。

Saser Kangri 山群の天気は、8月下旬頃から4日周期で1日の晴天がくる状態であった。C4入りの日が晴天であったので、明日のアタック日は天気が崩れると予想された。

しかし、その夜のトランシーバーによるとABCとの交信では、インド気象台発表のデータによると、明日も今日と同様、Complete Fine(快晴)とのことであった。明日の晴天を期待し、早目に寝袋にもぐり込んだ。峯本隊員は、用意した目覚し時計を午前3時にセットした。高度の影響と明日のアタックへの期待で、夜半にしばしば目が覚めた。

何時間か、うとうとしていると目覚し時計が午前3時を告げた。早速、寝袋から這い出し、インスタントうどんと餅を取り出し、ガス・コンロを使って朝食作りにとりかかった。

その間、ラダック出身で信心深いSmanlaは、ラマ教の教典を出し、いつもより熱心にお祈りをしていた。Prahlad Singhはチャパターの粉を食器に取り出し、水を加え、念入りに手でこねていた。

急いで朝食を終え、身仕度をした。山靴をはき、オーバー・シューズをつけ、テントの外に飛び出した。

外は、月光で明るく、星がまたたいていた。クランボン、安全ベルトをつけ、仕度のできた隊員から出発した。時計を見ると午前5時になっていた。

すでにAngchockの事故の前にルート工作の済んでいた急な雪壁に取り付いた。そこを50m程、トラバース気味に進むと、岩と氷のミックス帯にでた。ここは岩を避けながら、ジグザグにルート工作がしてあった。そこをフィックス・ロープに導かれ、200m程登ると標高6,920mの小さな鞍部にでた。鞍部から尾根に沿って登ると、Sakang Peakに続くプラトーに出るが、その上部の岩壁は

大変難しいそうであった。そこからのルートはNorth Shukpa Kunchang GL側の雪面にとってあるが、ここまでの先日のルート工作は終わっていた。

まず、Smanla、Chholdon、Prahlad Singh、Chait Singhのインド側隊員4人が先行し、雪面のトラバースにとりかかった。雪面は表面だけクラストし、その下は大変軟らかい深雪であった。フィックス・ロープの支点にするスノーバーが打ち込めず苦労した。腰近くまでの雪を取り除き、その下の硬い雪面にスノーバーを打ち込み、少しずつ前進した。雪面の途中にある岩稜帯は、その基部を廻り込んだ。廻り込んだ所から上部の雪壁の直登になるが、深雪も腰の高さとなり、登高は困難を極めた。

時間はどんどん経過して行った。天気は良いが、7,000mを越す高度では、風は冷たく、ルート工作を見守っていると、寒さで手足が冷たくなった。

100m程のルート工作に約4時間を使い、プラトー上部の主稜線のコル(約7,100m)に出たときには、時計は12時を10分ほど過ぎていた。

そこで、チョコレートを頬張りながら上部ルートを偵察した。頂上近くまでは、ところどころに岩稜が見られたが、雪面が続いていて困難な箇所は見当らなかった。雪も堅く、4～5時間かければ登れる可能性は充分にあった。しかし、朝5時からの行動と、初めて7,000mを越えた高度の影響で体はだるく、下山のことを考えるとこのまま頂上を目指して突っ込むのは危険だと感じた。

昼食を終え、そこから大きな岩をまきながら80m程雪壁を登り、標高7,150mの地点で今日の行動を打ち切った。明日以後の天候を考え、最高到達点になるかもしれないと思い、そこで記念写真を撮り、下山にとりかかった。

深雪の下降は、支点のスノーバーに何となく不安を感じたため、1人1人が慎重に行動した。午後3時、C4に帰着した。

こうして、第1次アタックは、頂上へのルートの見通しはつけたが、頂上を踏むことはできなかった。

頂上へ向って

岡本 正人

Angchockの仮り埋葬を済ませ、9月1日、気分転換のため、BCに下って休養することにした。途中、ABCに立ち寄り、Hukam Singh 隊長に今後の計画などを聞いた。

「現在のC4の位置から頂上までは高度差と距離がありすぎる。したがって、C4をもっと標高の高い地点へ上げる。不足している登攀用具、食糧を荷揚げする。このC1-C3間の荷揚げには3名のポーターを使う」とのことであった。これに対して、私はポーターを使用してのC1-C3間の荷揚げには反対した。彼らは登攀技術がなすすぎるからであった。「ポーターは、日常、これ位の標高で、羊やゾッパを追って生活している。また、C1近くの氷河でトレーニングもしたではないか」と主張した。何度も繰り返して話したが私の意見は聞き入れてもらえなかった。

ABCで午後2時近くまで休み、BCへ下った。

BCは静寂そのもので、10人位収容できるバオ形の大きなテント2張は荷物置場になっていた。その周辺では、枯れ残った草をあさるように数頭のゾッパが草を食んでいた。人気のするのはコックのいる石室と休養に下っていたインド隊員のいるテントだけだった。

ここ数日間続いた気温の低下で水汲み場の上部の氷河の水も解けなくなったのか、いつものように水汲み場には水が流れておらず、待機中のポーターが約100m下流のChameschen Lungpaから水を選び上げていた。

また、食糧も乏しく、紅茶などもすでになくなっていった。日本から持ってきていた麦茶に砂糖を入れて飲んだ。ここもまた、上部テント地と同じく、夜間にはかなり冷え込んだ。スベアとしてデポしてあった羽绒服、羽ズボンを着て寝袋にもぐり込んだ。

9月3日、7時30分、BC出発。

C1に入るためにTyagiと一緒にBCを後にした。彼の荷物はポーターが背負った。インド側隊員はあまり荷物を背負わないようだ。12時ABC着。待

機していたHukam Singh隊長から頂上アタックの計画を聞いた。

「今日、早朝、インド側隊員6人、日本側隊員2人がC1からC4に向かって出発した。4日には、頂上より彼らの声がトランシーバーから聞こえるはずだ。もし、頂上へ行く気ならいっていいが、6日の夜までには必ずBCに戻ってくれ。すでに撤収のためのポニーやポーターはそのつもりで手配をした」とのことであった。そんなに急ぐことはないと思ったが、不本意ながら承諾した。

9月4日、ルック・サックに食糧12食分、ガス・カートリッジ4個をほうり込み、C1を午前7時に出発、Sakang Peak側の懸垂氷河の崩壊を気にしながらC2に向かって進んだ。クレバスも2箇所、大きな口を開けていた。

C2まで1時間半、午前8時30分に着いた。先着していた撤収パーティーは荷物を整理していた。今日でC2が撤収されると思うと少々心細かった。彼らに見送られ、Saser Kangri-2とSaser Kangri-3の間のコルに向って左上より4つ日の一番長いルンゼに向かった。フィックス・ロープ伝いに約150m左上に登った。自然落石に注意しながら岩場を抜け、稜線まで続いているルンゼに入った。このルンゼの傾斜は、ところによって約30°～70°で堅い雪面であった。

途中、ルンゼの中程のAngchockの避難地点で歩みを止めた。フィックス・ロープより約20mのところをゴーグルとアイス・バイルが落ちていた。ここから約300mの氷と岩の壁をゴム鞆のように落ちていったのであろうか……。しばらく黙祷した。

稜線直下ではさらに雪は堅くなり、完全な氷の状態であった。1歩ごとに3回程、アイゼンのツメをけり込んで足場をつくった。

午後1時半、稜線に出た。左手にNorth Shukupa Kunchang GLが見えた。この足で踏み締めたかった氷河だ。North Shukupa Kunchang GLは、表面の雪が融け、黒々とした5,000m～6,000m級の山裾をShyok河に向かって左にカーブしながら

ら流れ落ちていた。

登路を振り返ると、井戸の中を覗き込んでいるようであった。当初、予定していたSaser Kangri-2とSaser Kangri-3の間のコルへの登路(1946年7月にJ. O. M. Robertが登ったコル)を見下すと、尖塔のような岩峰が縦列をなしていた。斜面に張られたC3のテント2張りは、半分雪に埋もれていた。入口を掘り、中に入って休憩。

午前2時30分頃、C4着。総勢9人となる。4、5人用のテントに5人も入ったので窮屈だった。

C4に着いて初めて大事なことを知らされた。それは、地図上に示されている7,518mのPeakまでは行かず、頂稜の一番西にある7,518mのPeakと同じくらいの標高だとインド隊員が推定したピークをSaser Kangri-2とみなして登ることになったということだった。天候の悪化のためか、それとも食糧が底を尽きかけていることか、明確な理由は聞けなかった。眠れない夜を過ごした。テントの居住性の悪さがこれに輪をかけた。

9月5日、一睡もできないまま、朝を迎えた。徳島は、C1に下るための仕度をしていた。峯本は停滞。気温もかなり低くなっていた。

外に出ると、ひどいブリザードであった。突風で時々体が浮いた。視界も悪かった。フィックス・ロープは、ほぼ、稜線上に張られていた。アタック隊の最後尾をフィックス・ロープにぶらさがるようにゆっくりと登っていった。寒かった。登り始めて2時間程経っても体は全く暖まらなかった。コマールを握っている左手が凍るようだった。立ち止まっては懐に手を入れた。先行したインド隊員に追いつこうと焦るが距離はなかなか縮まらなかった。

なおも進もうと努力したが、疲れと寒気に抗しきれず、遂に、直接コルにトラバースする地点より、今日の登頂を諦めて下ることにした。

12時頃、C4に到着。峯本もテントの中で寒さに震えていた。

午後2時、Smanla達が途中から帰幕。吐く息が凍りついたのか、鼻から唇にかけて氷がぶら下がっていた。この日は、結局、前日のルート工作地点(約7,150m)よりフィックス・ロープ2本分(約100m)だけルートをのぼしただけだった。

9月6日、悪天候のために停滞。峯本はC1へ下った。明日も同じような天候であれば、インド側隊員はC1まで下るとのことだった。

9月7日、天候はやや回復したが風は強かった。目は覚めているが起きる気がなかった。午前5時頃、食事を作り始めた。インド側隊員は起きようとしなかった。寝袋に入ったままだった。彼らは、今日は、食事をしないようだった。クリシュナ神の誕生日とかで、断食らしかった。お茶を飲んだだけのようだった。

私は、今日も食事があまり咽を通らなかった。外では、もう、Phu Dorjee, Wangdus, Chholdonが出発の用意をしているところだった。今日は何としても頂上に立ちたい、彼らに比べて私は登高のスピードが遅いので、途中でビバークをすることになるかも知れないと考え、食料、燃料などを持っていくことにした。

Phu Dorjee, Wangdus, Chholdon、少し遅れて、Smanla, Prahlad Singh、私の順で登り始めた。Chait Singhは体調を崩し、C1へ下って行った。

C4から200mほど登ると、岩稜(2-3級程度)になった。岩稜は徐々に傾斜を増し、Saser Kangri-2からSakang Peakへと続く稜線に突き上げている。途中、岩棚にインド側隊員のリュック・サックがデポしてあった。

Smanlaが、私を待ってくれているのだろうか、ときどき立ちどまって後ろを振りかえっていた。

コルを目指し、Shukpa Kunchang GL側をトラバース中、Prahlad Singhが下ってきた。両手に凍傷を負ったようだった。

Phu Dorjeeが右、左と動いてルートを探していた。左は岩壁、右は垂直に近い雪稜であった。彼は中央部にルートをとった。Smanlaは、彼らの約100m下にいた。

私は、この頃から足が重く、呼吸回数が多く、体がフラフラしだした。体調が悪くなったのが分かった。立ちどまった。そして、遂に、座り込んでしまった。

しばらく休憩したが、体調は良くならなかった。残念だが下ることにした。

下り始めたが、フィックス・ロープにエイト環をかける作業さえ辛かった。フィックス・ロープ

がピーンと張ってあるので、この作業は余計に辛かった。何回も腰を下ろして休んだ。とにかく焦らずに下ることにした。

やっとC4に着いた。紅茶を沸かして飲んだ。体調はやや回復した。気が付くと、私のリュック・サックの中にあるはずのツェルトがテントの傍に転がっていた。今朝、リュック・サックに入れるのを忘れていたのだ。やはり、かなり高度の影響を受けていたのだろうか…。体調の回復には高度をできるだけ下げたほうが良いので、疲れた体に鞭打ち、C1へ下ることにした。

C4あたりから Saser Kangri-3 の方を眺める

と、こちらからはとても、直接に、Saser Kangri-3へ取り付けそうになかった。Robertsのコルから先の岩稜は、垂直に近く、それも、一部は懸垂氷河に遮られて、頂上に続く雪田に続いてはいないようだった。C1から見たときは、緩やかに見えた頂上に続く雪田もここからだ雪壁のように見えた。頂稜には2つのピークがあり、北西のピークが少し高いようである。背後には、Saser Kangri-2が辺りの山々から頭一つをリードして見えていた。

一歩一歩慎重に下った。下った分だけ Saser Kangri-2の頂上は遠くなった。私の Saser Kangri-2の登山の終りであった。



Two of the four summiters hoisting the national flag at the Saser Kangri-II peak (7518 metres) in the Himalayas.

登山隊のニュース
インド英字紙「Patriot」
1985年9月22日号

Four Indians atop virgin Saser Kangri-II

Our Staff Reporter

Young mountaineers, both Indian and Japanese, who kissed the virgin Saser Kangri peak II at 7518 metres in the Himalayas had an eventful tale to tell about their joint expedition completed on 7 September last.

After a function hosted by the Indo-Tibetan Border Police and presided over by Home Minister S B Chavan in the Capital on Saturday, the exuberant members narrated how four amongst them, all Indians, climbed to glory and how Nk Tsering Angchuk breathed his last on the snow.

The four successful summiters, Phu Dorjee, Sonam Wangdus, Tsewang Smania and Sheru Chhoidon, after setting foot on the peak, hoisted the National Flag, the ITBP flag and the Indian Mountaineering Foundation flag atop the summit.

Raggy and stout, Masato Okamoto (Japanese) and Hav Prahalad Singh who had to return when they were hardly 300 metres short of the summit, were left with

an unfulfilled dream. They were resolute about touching the summit in the next expedition.

The Indian Mountaineering Foundation in cooperation with the ITBP arranged the Indo-Japanese expedition with the aim to violate the untouched peak in the Karakoram range recently opened for international mountaineering expeditions. Comdt Hukum Singh was the leader of the joint venture. So far the ITBP have scaled 41 major peaks in the Himalayas of which 28 were virgin.

The expedition set off for the mountains on 3 August after calling on Mr Rajiv Gandhi at New Delhi.

After surmounting colossal odds and approach march through most hazardous route, the team set up base camp on 8 August at the snout of Sakang Lungpa glacier at 4800 metres. Five higher camps were set up beyond this camp. The summit camp was set up at 6650 metres after 20 days of strenuous

expedition.

The Japanese leader and an Indian member had then to abandon the expedition. Within hours of that, Nk Tsering Angchuk fell down over 100 metres on the rock ledge and died instantaneously. On 3 September, having braved all the odds, they resolutely climbed up. But nature had something else in stock for them.

The weather suddenly became hostile and nine amongst them (six Indians and three Japanese) had no alternative but to stay back at the camp at 6650 metres to pave the way for the summiters. At about 8000 feet, long rope had to be laid to open the route through fixed vertical rock face and steep icy slopes. Six members of the team left the Camp IV in the early hours of 7 September. After 11 and a half hours gruelling climb, four of them could set foot on the summit at 5.30 p.m.

Mr Chavan presented mementos to the members of the joint expedition. He assured that the

Government would do whatever possible to rehabilitate the family of late Angchuk. ITBP director general O P Bhutani lauded the team members.

UDF sweep JNU Staff Assn poll

Our Staff Reporter

The United Democratic Front Congress unit of the JNU Staff Association swept the polls in the recently held association elections.

The UDF has won all the five posts of office-bearers with huge margins. It has also won 12 posts out of a total of 16 on its executive council. Mr K N Joshi and Mr Krishan Gopal have been elected president and vice-president, respectively.

初登頂

Sonam WANGDUS

9月7日、午前5時30分に起床し、日本食を少し、紅茶を一杯、ツァンパ（麦こがしのようなもの）をつまんで簡単な朝食を済ませた。午前6時30分C4を出発した。天気は良かった。

C4から20m登った地点から、急峻な氷と岩の斜面になり、そこからフィックス・ロープが始まった。傾斜は約80°あり、登攀は非常に困難であった。ときどき風が強く吹いたが、天候は良かった。

1時間ほど登ったところでPhu Dorjee, Sherap Chholdonと私は暫く休憩した。C4のほうを見下ろすとTshering Smanla, Prahlad SinghがC4のすぐ上を登っているのが見えた。岡本の姿は見えなかった。彼は、多分疲れて登るのを止めたのだろうと思った。

私達3人は、再び登り始め、岩の上に達した。その岩のところから、フィックス・ロープに沿ってトラバースを開始した。

コルの近くに達したとき、振りかえってみると1人だけが登ってきていた。Smanlaだった。Pralhad SinghはC4へ引きかえしたようだった。トランシーバーでHukan Singh隊長に報告した。

コルでSmanlaを待った。Smanlaが到着したので私達3人と一緒になって、フィックス・ロープを3本もって頂上へ向かって出発した。最後のフィックス・ロープに着いた。そこからルート作業を開始した。Phu Dorjeeがロープを固定している間、私が彼を確保した。行く手には2つの大きな岩壁があった。最初の岩壁は左側を登った。傾斜の急な岩と固い氷だった。私達は疲れてきて、頂上に着けるかどうか心配だった。今までに、こんなに急な岩や、ロープをフィックスするためのスノーバーを受け付けられないような固い氷壁に出会ったことがなかった。

第2の岩壁は、左側にルートをとった。そこには非常に狭いチムニーがあったが、ロック・ピトンを打つことができなかった。悪戦苦闘し、やっとの思いでチムニーを抜け、岩壁の上に出た。

岩壁の上から頂上までは、上を歩くのが困難な痩せた雪稜が続いていた。時間は、もう午後4時

だった。風はますます強くなり、困難さは増してきた。しかし、私達は、それに挫けず、上へ上へと向かって行った。

頂上直下に達した。そこからは、頂上の右側に向けてルートをとった。非常に急傾斜であった。フィックス・ロープがもう3、4本欲しかったが、残念ながら、すでに使い果していた。2本のクライミング・ロープを使って登ることにした。ピトンを打ち、確保しながら頂上へ向かった。

午後5時30分、頂上に達した。インド国旗、ITBPの旗、IMFの旗、ガルワル・ライフル隊の旗などを揚げた。頂上から隊長とトランシーバーで話し、頂上とその周辺の写真を撮った。頂上には約40分滞在し、C4へ下降を開始した。

午後6時10分、コルの近くに着いたとき、あたりは真っ暗になってしまい、視界が効かなくなった。ヘッド・ランプをもっていたPhu Dorjeeが先行した。彼はどんどん先に下っていった。私もヘッド・ランプをもっていたが、SmanlaとSherap Chholdonはヘッド・ランプを持っていなかったので、真っ暗な闇にお手あげだった。もし、私も先に下って行ってしまったら彼らは下ることはできなくなるだろうと思った。そこで私が中間を歩き、Smanlaに私の前を歩かせ、Sherap Chholdonは少し離れて私の後を歩かせた。

私がSmanlaをヘッド・ランプで照らし、フィックス・ロープにユマールを掛け、カラビナを通し、フィックス・ロープに助けられながら下った。30m下ると、Smanlaはセルフビレイし、次に私がSmanlaのところまで下った。そして、後ろを振りかえり、下降にかかったSherap Chholdonを照らした。

C4まで私達はこの方法で下った。疲労、咽喉の渇き、空腹などと闘いながら、C4までたどり着いた。午後11時30分だった。Phu Dorjeeは、午後9時15分にC4に着いていた。天候は悪化し、雪が降りだし、強風も吹き出した。Phu Dorjeeと連絡をとりながら心配していたHukan Singh隊長とトランシーバーで私達は代るがわる話をした。隊長は心から初登頂を喜んでいた。

登山ルート

BHからBCへ

沖 允人

BHからBCまでは、途中、2つのテント地を経て、普通に歩くと、2泊3日の行程である。Pinchmikの村から見える正面の三角形の岩山の頂上近くが第1テント地である。ここに達するには、BHの前の河原を右手に進み、岩山から南東に延びてきている稜線に取り付く。稜線上の踏み跡に沿って約2時間登ると、台地状になったところに着く。展望はよいが、残念ながら近くに水がない。

そこから、さらに、30分程登ると、やや広い台地がある。ここが第1テント地である。標高は、約3,900mである。ここでも水は得られない。

第1テント地から岩のごろごろしたやや急な斜面をジグザグに1時間程登ると、標高約4,500mの屋根上のコルに達する。この屋根はTegar(5,909m)から南西に派生している大きい屋根である。ここからSaser Kangri-2とSaser Kangri-3が遠望できる。

このコルからトラバース気味に2つ程広い岩尾根を廻りこむと大きな谷を見下ろす地点に着く。谷に向かって急斜面を下る。谷には水が流れているが、兩岸が今にも崩れそうな岩と砂まじりの壁で、とても泊まり場としては使えないところである。

谷の対岸を約1時間程登り返し、もう一つの谷へ下る。そこは、やや広いテラス状のところがある。少し下ると水も得られる。ここが第2テント地である。標高は、約4,350mである。

第2テント地から約30分、岩と砂混じりの斜面を急登すると、広々とした斜面にでる。トラバース気味にChameshen Lungpaに下って行く。ここから一度、水量の多い谷を渡る。大変気分のいいところで草も少し生えている。Chameshen Lungpaの右岸の岩と砂ばかりの屋根がすぐ目の前に迫っている。この谷は、渇水期には山羊なら通ることのできる踏み跡程度の道があるそうだが、7月から9月にかけては水量が多く、とても谷どおしには下ることはできない。

Stondok GLから流れだした水がいくつもの小

さい川となってChameshen GLへ流れ落ちている。うまく渡れば、靴を脱がないでもよい程度の流れである。

第2テント地から約2時間で、Stondok GLに続く谷を横切り、そこを過ぎてしばらくでカルカに着く。そこは、すぐそばをきれいな水が流れている草原である。夏場のみ、1家族が住んでいる。

やがてSakang Lungpaのモレインが迫ってくると、BCは近い。緩やかな斜面に水がちょろちょろと流れ、あたりには小さな草が一面に生え、エーデルワイスの花もあるオアシスのようなところに着く。そこが標高約4,800mのBC地点である。第2テント地から約5時間で着く。BC地点の左右には6,000m級の岩山がそそり立ち、正面にはSakang GLの累々と続くモレインの丘が迫っている。谷の下方には、Nubra谷の奥の雪を頂いた山々が望見できる。

BCからC1へ

沖 允人

BCからC1へは、約9kmの距離があり、登り約8時間、下り約4時間で、普通は、途中のABCに泊る1泊2日の行程である。強行すればBCからC1まで1日で往復できないこともない。

BCからは、すぐにモレインの中に入る。幅、約500mのモレインの中を登っていく。小さい登り下りが何度となくあり、かなり疲れる。BCから見える一番上のモレインの中の大岩のところまで約2時間かかる。

さらに、モレインの小山を登り下りしながらだんだんに高度を上げていく。氷河の中には、ところどころに小池ができています。

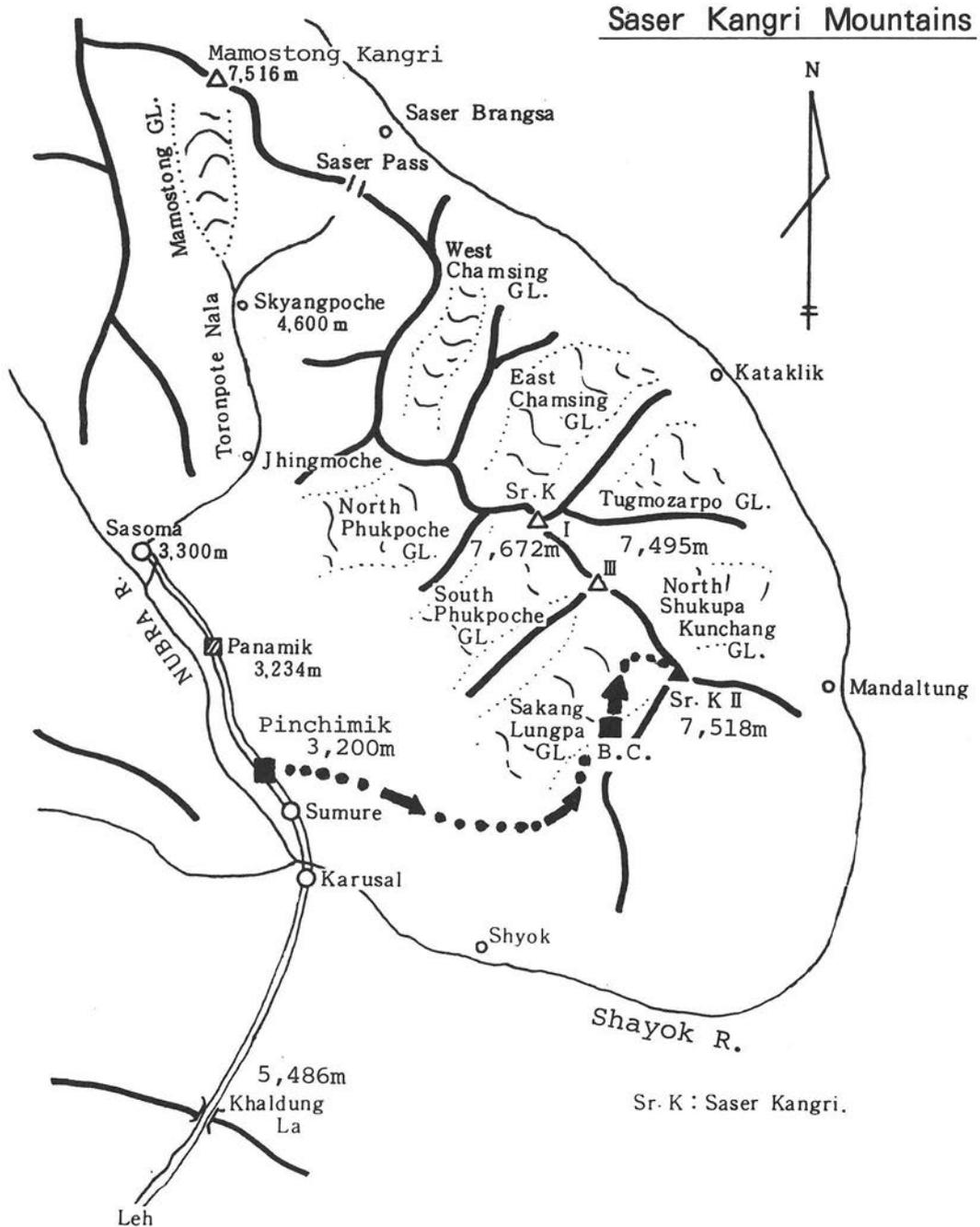
やがて、右手から大きな氷河が下ってくるのに出会う。Look Out Peakの南の氷河である。氷河の舌端は、かなり荒れていて、アイス・フォールとなってSakang GLに合流している。このあたりで、谷の中心部には水が現われる。

氷と岩の間に左寄りに登っていくと、モレインの長い丘の上に着く。左右は氷河である。そこがABC地点である。標高は、約5,400mである。AB

Cからは、Saser Kangri-2、Saser Kangri-3、Saser Kangri-4 がずらりと見え、壮観である。ヒマラヤにはるばるとやってきたという感じがする。

ABCからは、右手に大きく廻りこむようにして、Look Out Peak を右に見ながら登って行くと、P. 6,900 のすぐ下の岩壁の近くに着く。ここがC1 地点である。水も豊富で、あたりは広々とし、絶好のテント地である。標高は、約5,700m である。

C1 から Sakang GL の左奥に入り、やや、右手の、Saser Kangri-2 寄りの氷原をルートにとる。ヒドン・クレバスが多く、登高に気を使うところである。C1 から約2 時間で Saser Kangri-2 と Saser Kangri-3 を結ぶ岩尾根の基部近くに着く。標高は、約5,800m である。ここがC2 地点である。氷河の真っ只中といったところで、C3 への取り付け点が見え、すぐそばに見えている。



C2からC3へ

徳島和男

C2とC3の標高差は、約600mである。

C2は、Sakang Peak側にある上部の懸垂氷河からの雪崩を避けるように設営されたが、C2から、傾斜の緩い雪壁を約30分、標高差にして約100m程登ると、フィックス・ロープの始点①に着く。

ここからフィックス・ロープに導かれ、約5m登ると、約1mの幅のクレバス帯がある。クレバス帯のルートは、スノー・ブリッジが一部崩壊した箇所にとる。

ここを乗り越すと、やや、急な雪壁が約70m続く。雪壁を直登し、大きくトラバース気味に約80m登ると岩溝の基部②に着く。

そこから崩壊した脆い岩溝を、落石に気をつけながら約100m進むと絶好な岩棚の休憩点に達する。

そこから傾斜はきつくなる。まず、雪壁を約100m直登するとハング気味の岩壁にぶつかる④。そこから右に30m程トラバースして右側の岩壁にルートを取り⑤、20m程直登する⑥。直登した後、再び、氷壁を左にトラバースする⑦。トラバースが済むと、氷と岩のミックスした地帯を約100m直登する⑧。直登が終ると、再び、氷壁を右にトラバースし、岩溝にでて、20m程直登する⑩。

直登が済んだ後、トラバース気味に岩壁を登ると、岩溝の上部の分岐点⑩にでる。ルートを右の岩溝にとり、氷と岩のミックスした岩溝を約100m登ると稜線にでる⑫。稜線上の急な雪壁を50m程登るとすぐ右側の岩稜の基部の小さな雪の棚に達する。そこがC3地点である。C3の標高は、約6,450mである。

C3からC4へ

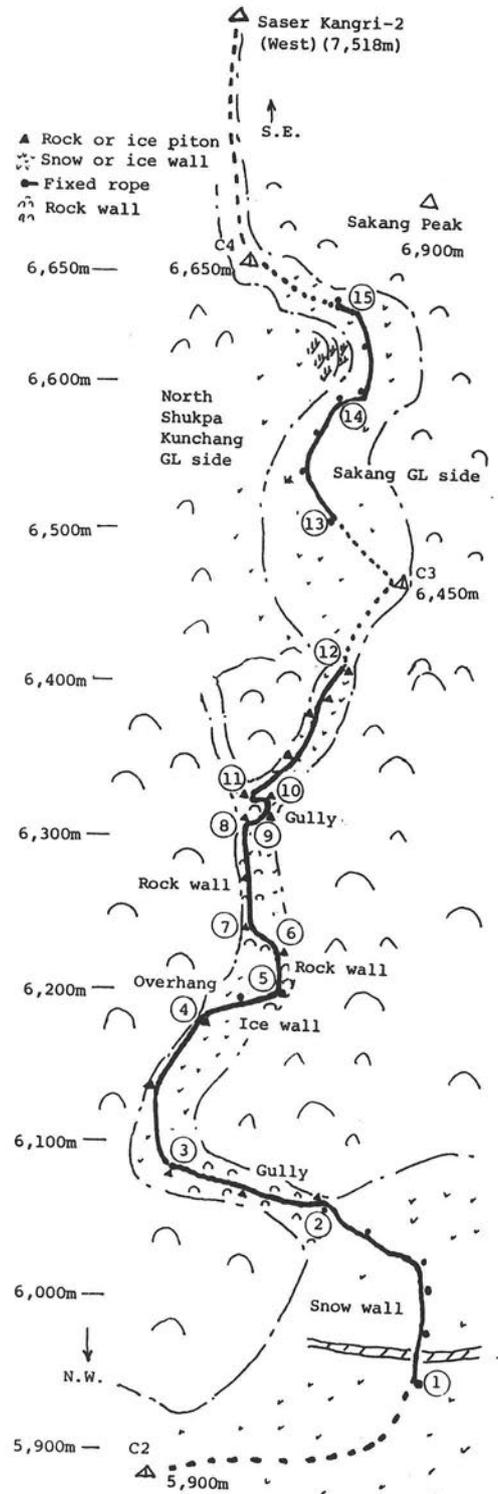
徳島和男

C3とC4の標高差は、約200mである。

C3から左へトラバース気味に雪壁を40m程登ると、フィックス・ロープの基部に着く⑬。そこから急な雪壁を約100m直登すると、小さな鞍部にでる⑭。鞍部からは東側に大きく張り出した雪庇を廻りこみ、急な雪壁を80m程直登すると⑮、急に傾斜が緩くなり、大きな鞍部にでる。

緩やかな斜面の雪の尾根を40m程進んだところがC4地点である。C4の標高は、約6,650mである。C4から頂上へは「頂上へ向って」の項を参照。

Route between C2 and C4



登山隊日誌

日本出発

沖 允人／安藤忠夫／徳島和男

- 7月14日 先発の出発予定日の7月7日になってもエントリー・ビザが取得できず、やきもきしたが、7月10日やっと発給されたので、先発と本隊が一緒になり、岡本登攀隊長、安藤、徳島、峯本の4人が成田発 AI 301 便で日本を離れた。
- 7月15日 IMFに併設された宿舎で旅装を解いた。早速に、日本大使館、Shikhar 社、AIの Jogindar Singh 氏などを訪ねインド入国の挨拶を行った。
- 7月16日 インド側隊員 Chait Singh と会い日程の調整をした。Shikhar 社にあるデポ品の回収を行った。
- 7月17日 インド側の Hukam Singh 隊長が勤務地の Leh から Delhi に到着せず、インド側が行う予定だった隊荷の通関ができなくなった。やむを得ず Shikhar 社を通して隊荷の通関手続きをすることに決め、その打ち合わせに入った。
- 7月18日 通関のために IMF が発行した書類が不備で、本日は通関できなかった。食糧の買出しを行った。夜、Jogindar Singh 氏宅で Dinner Party。
- 7月19日 岡本、安藤、峯本の3人がインド税関の保税倉庫へ出掛け、無線機を残して通関の済んだ隊荷を受けとった。
- 7月20日 Hukam Singh 隊長が Delhi へ到着。この数日間、カシミール地方が大雨で飛行機が飛ばなかったとのことであった。
- 7月21日 Hukam Singh 隊長と2回目の日程などの打合せを行った。
- 7月22日 IMF 事務所で登山の打合せや装備の点検をする。
- 7月23日 岡本と峯本が、のびのびになっていた無線機とその使用許可証を受取った。Rajiv Gandhi 首相との会見が26日に行われることに決ったので、隊員の Srinagar への移動は27日に変更になった。
- 7月24日 Rimo 山群登山の帰りだというインド・英国合同隊の隊員が IMF へ挨拶にきた。さっそく Siachen GL 一帯の情報を仕入れた。インド側隊荷の準備が間に合わず、隊荷の送り出しは26日以後になるとの連絡があった。
- Hukam Singh 隊長宅で Dinner Party が催され、約30人が出席した。
- 7月25日 インド側が用意したプロパン・ボンベ34本が IMF の私達の部屋へ運び込まれてきた。夜になって ITBP 基地で、100人を超す参会者による盛大な Dinner Party が催された。
- 7月26日 Rajiv Gandhi 首相に謁見。首相より、激励のお言葉をいただいた。
- その後で ITBP の本部を訪れ、ITBP 総司令官 O.P. Bhutani 氏より ITBP 旗を受取った。
- 7月27日 Delhi 発午前11時30分の IAC 便で岡本、峯本が、午後1時30分発の IAC 便で、安藤、徳島が Srinagar へ移動。Srinagar 空港からは ITBP のジープで ITBP の Transit Office に寄り、挨拶をすませたのち、Tourist Reception Center に投宿。
- 隊荷は、午後、Delhi を発った。
- 7月28日 Hukan Singh 隊長の案内で、郊外の Gulmarg へ行った。ここでスキー学校の校長であり、この公園の管理責任者の Yoginder. C. Khanna 氏を訪問。彼は1973年の Saser Kangri-1 隊の登頂者である。
- 7月29日 ITBP のジープで日本側隊員4人の他、Hukam Singh 隊長、ドクターの C.R. Pattanayak、および、運転手の7人で Kargil に向かった。途中、Sonamarg および、Dras の ITBP の基地で休憩し、Kargil の街にある Circuit House には午後6時45分着。
- 7月30日 Kargil を早朝に出発。途中、Alchi のゴンパを見物し、Leh の宿舎 Hotel Antelope へ午後7時に到着。

- 7月31日 午前10時、隊荷が到着。さっそく荷物の整理。夕方、ITBPのHukam Singh隊長の官舎でDinnar Partyが開催された。このとき初めてインド側隊員全員の紹介があった。
- 8月1日 登山隊の費用の分担について話し合うが結論はでなかった。
夜、ITBP主催のDinner Partyが開かれた。連夜のDinner Partyにいささかうんざりであった。
- 8月2日 ITBPの病院へ行き隊付きドクターより検診を受けた。その後、Hukam Singh隊長をはじめ日本側隊員4人とインド側主力メンバーで陸軍へ出向き、司令官のBig.R.K.Jun氏に会い、協力要請と入山の挨拶を行った。
夕方、1973年のSaser Kangri-1の登頂者、Sonam Parjol氏の招待でビールのもてなしを受けた。
- 8月3日 ITBPのLeh基地の多勢の人々の見送りをうけて、Lehを出発。
Khardung La (5,486 m)を越え、標高、約3,200 mのPinchimikの村に午後10時30分到着。

Nubra 谷にBHを設置

- 8月4日 Pinchimikの村はずれに小屋を借り、ベース・ハウス(BH)とした。Hukam Singh 隊長が登山の開始を前にして決意を表明し、今後の計画についてのミーティングを行った。また、明日からの荷揚げにそなえて、隊荷の再梱包を行った。
- 8月5日 トラック1台余りの隊荷に対して、ポーター8人、ポニー2頭しか集まらず、隊員も総出で標高約3,900mの地点まで荷揚げ。この地点は、第1テント地と呼ばれた。夕方、先発のインド側隊員3人が第1テント地へ入った。
- 8月6日 ほとんどの隊員、ポーター11人、ポニー5頭が第1テント地へ荷揚げをした。
先発の隊員5人が、標高約4,500mの尾根を越し、Chameshen Lungph (Chamshing Lungpa)の標高約4,350mの第2テント地と名づけた地点へ入った。
夕方、Lehから隊荷を積んだトラックの第2便が到着。
- 8月7日 ほとんどの隊員とポーター18人、ポニー17頭によって第1テント地へ荷揚げが行われた。

Sakang GL.にBC建設

- 8月8日 先発隊がSakang GL 末端の、標高約4,800mの地点にBCを建設。
岡本は、一気に、標高約4,500mの尾根を越えて第2テント地へ入った。
安藤、徳島、峯本とインド側隊員にポーターを加えた15人ほどの本隊が第1テント地へ移動。
- 8月9日 本隊が第2テント地へ移動。
8月3日に日本を発った沖隊長が、LehからBHに到着。
- 8月10日 インド隊員が付き添い、ポーター22人で第1テント地と第2テント地との間の荷揚げを行った。
しかし、帰路、ルートの悪さに嫌気のさした4人のポーターが離脱した。
- 8月11日 岡本、峯本がBC入り。安藤、徳島は、第2テント地からBCへ往復した。
- 8月12日 岡本、峯本、Phu Dorjee, Wangdus がABC建設用資材の荷揚げと上部ルートの偵察を兼ね、Sakang GLを2時間ほど遡り、Look Out Peakの西方で南から流れ込む氷河に入って標高約5,400mの地点まで達した。その結果、「このルートは厳しすぎる」との報告をもたらした。
安藤、徳島は、コックらとともに、BCへ到着。
下部では、この日もNeema Dorjee, Prahlade Singh が、第2テント地への荷揚げを行った。
- 8月13日 安藤、峯本、Tyagiの3人が、前日偵察した氷河に入り、標高約5,500mまで登った。この地点から見る西面、および、南面はどれも下部が岩壁に妨げられて取り付けそうにないことを確認した。一方、Sakang GLの本流を遡った岡本、徳島、Phu Dorjeeの3人は、標高約5,600m地点まで達して、Saser Kangri-2とSaser Kangri-3との間のコルへ登れそうであることを発見

- した。この偵察の結果、Sakang GL本流から主稜線上のコルへ達するルートを探ることに決定した。
- 8月14日 BCの隊員は、この日は休養した。Hukam Singh隊長、および、インド側隊員がBC入りした。
- 8月15日 インドの独立記念日なのでBCでも式典を行った。
隊荷の大部がBCへ運ばれ、日本側隊員は、久しぶりに日本食を味わった。
夕方になって、沖隊長が、第1テント地から一気にBCへ入った。
- 8月16日 HP 6人を含む、総勢17人がSakang GLを約6時間登ってSakang Peakの直下にC1を建設した。C1には安藤、峯本、および、インド側隊員2人、HP 2人が入った。
- 8月17日 BCとC1の間の距離が長いのと、山の蔭でトランシーバーの交信ができないので中間点にABCを建設。この日、安藤とPhu DorjeeがC1から標高6,100mの稜線上のコルに達した。しかし、このルートは、予想以上に悪いので、Saser Kangri-2寄りに別のガリーをとるルートを見つけてそこに変更することとして、C1に帰着した。また、先日、別の氷河を偵察したときにデポしたままになっていたテントなどを、峯本、Wangdusなどが回収し、C1へ運んだ。
徳島は、BCからC1へ入った。
- 8月18日 徳島、峯本の2人は、17日に偵察したガリーのルートが使えるかどうかの確認のために、標高約5,900mの地点まで試登した。その結果、ここをルートとした場合、主稜線へ抜けでる地点が相当上部になり、傾斜がきついが、C1からの距離が短いこと、他に適当なルートが見出せないことなどの理由でこのルートを頂上へのルートとすることに決めた。

主稜線のルート工作

- 8月19日 インド側隊員2人がガリーの下部にルート工作しロープをフィックスした。徳島、峯本はC1で休養。
- 8月20日 徳島、峯本、インド側隊員4人がガリーの上部までルート工作し、ロープをフィックスした。ガリーの取り付けの標高約5,900m地点にC2を建設。
- 8月21日 インド隊員によってC2とC3の間のルート工作を行った。
徳島、峯本は、BCへ下った。BCへ下る途中、ABCで沖隊長、岡本、安藤と会った。日本側隊員の5人の全員が初めて顔を合せた。
- 8月22日 インド隊員によってガリーを抜けでた主稜線上の標高約6,450mの地点にC3を建設し、Phu DorjeeとWangdusが入った。
一方、岡本と安藤はC2への荷揚げをし、安藤はそのままC2に泊まった。
沖隊長は、ABCからC1へ入った。
- 8月23日 C2では、朝から小雪。安藤、Smanla、Chholdon、の3人がC3への荷揚げを行った。
- 8月24日 岡本とインド側隊員4人がC3へ荷揚げ、沖隊長、Tyagi、HP 2人がC2へ荷揚げを行った。
夕方、沖隊長と安藤が、明日、仕事の都合で下山の途につくのでC1で送別会を催した。日の暮れるころ、沖隊長、安藤はABCへ下った。
- 8月25日 峯本、Smanla、Prahlaad Singhの3人がC1からC3へ入り、C3に停滞していたPhu Dorjee、Wangdusと合流した。また、岡本、徳島、Chait Singh、Nima Dorjeeの5人がC1からC3への荷揚げをし、HP 2人は、ABCからC1への荷揚げを行った。
沖隊長、安藤はABCからBCへ下った。

沖隊長、安藤隊員の下山

- 8月26日 風が強く、午前10時頃、Sakang Peak側より大雪崩が発生。しかし、C1周辺に影響はなかった。上部キャンプのメンバーの全員はそれぞれBC、ABC、C1に下り、休養。
沖、安藤がBCを去り、Pinchimik着。

- 8月27日 岡本、徳島、AngchokはC1からC3へ、2人のHPはC1からC2へ荷揚げ。Chholdon、Nema Dorjee、Smanlaが、C3から約1時間登ったところの標高約6,650mの地点にC4を建設。
- 8月28日 C4の隊員でC4より上部のルート工作。C1から徳島がC3入り。さらに、C3からC4へ往復し、上部のデポ品の点検をした。
- 8月29日 C4の隊員でC4より上部のルート工作を行った。徳島はC3からC4を往復し、ビデオ撮影を行った。Phu Dorjee、Wangdus、Prahld Singh、峯本がC3入り。岡本はC1からC3へ荷揚げを行った。

Angchok 隊員の遭難死

- 8月30日 C3とC4の隊員は停滞。徳島はC3からC1へ下った。Chait Singh、AngchokとLP.2名がC3に荷揚げを行った。しかし、AngchokがC3からC2へ下降中、転落死した。
近くを下降していたインド隊員の話によると、その様子は次のようであったという。
Angchokは、C3からC2へ下降中、ゴーグルを落した。彼は、それを拾うためにフィックス・ロープからユマールを外して落したゴーグルのほうへ移動していた。そのとき、なにかのはずみでスリップし、そのまま、ほぼ垂直に近い斜面を300mから400mくらい滑落し、即死した。
- 8月31日 C1にいたChait Singh、Tyagi、岡本、徳島、LP.2人、C3より下ってきた峯本で、Angchokの遺体をC1まで運び、仮安置した。遺体の状態は、顔がつぶれ、頭骸骨がなくなっていた。また、遺体のあったあたりには、多量の血液が雪上に流れでていて、深さ40cmから50cmまでの間の雪が血で染まっていた。
Hukam Singh 隊長、Dr. Pattanayak がABCからC1に到着し、上部キャンプにいた他の隊員も全員がC1に集結し、午後3時から午後4時にかけて検死の後、葬儀を行った。
- 9月1日 全隊員が喪に服した。この夜はコッヘルで溶かしたギーを灯明の代りとして、一晚中、明かりを灯してAngchokの霊を吊った。
なお、この日、沖隊長は、国際会議出席のため、New Delhi から Geneva へ向い、また、安藤は、成田に帰着した。
- 9月2日 Hukam Singh 隊長は、全隊員をC1に集め、今後の行動について全隊員の希望を聞き、また、各自の今後の登山への意志を確認した。その結果、この悲劇を乗り越えて、登山を再開することを決定。
- 9月3日 インド側隊員と徳島、峯本がC1から直接C4へ入った。
なお、この日、Angchokの遺体は、C1近くのクレバスの中に丁重に葬られた。

登 頂

- 9月4日 午前3時起床。午前5時、インド側隊員6人と徳島、峯本が頂上へ向けて出発。
1時間ほどで、先日フィックスしたロープの終点に達した。しかし、そこから先は、深雪のために登高ははかどらず、また、ルート工作にもかなりの時間をとられた。明日、再度挑戦することとし、標高約7,100mの地点で登高を中止し、C4に戻って、そこに全員が泊まった。
この日、岡本は、明日の登頂にそなえて、C1からC4へ上がってきた。しかし、C4には4人用のテントが2張りしかなく、窮屈なため、全員が眠れない夜を過ごした。
- 9月5日 インド側隊員6人と岡本が頂上へ向かったが、天候が悪化し、頂上まであと約300mで登頂を断念した。この日、徳島はC4からABCまでくだり、峯本は、体調が悪く、C4で停滞した。
- 9月6日 上部は風が強く、登高できる状態ではなく、C4で停滞した。峯本はC4からC1へ下った。
- 9月7日 Phu Dorjee、Wangdus、Chholdon、Smanla、Prahld Singh、岡本の6人がC4を午前6時に出発し、頂上へ向かった。11時30分の登高の後、Phu Dorjee、Wangdus、Chholdon、Smanlaが午後5時30分頂上の一角(西峰)に着いた。インドなどの旗、また、「インドと日本の永遠の友情を。

IJKE'85」と書いた紙片を封入したポリ容器を頂上の雪の中に埋めた。岡本と Prahlad Singh は途中から下山。

- 9月8日 全隊員がBCに集結し、登頂を祝った。
- 9月9日 全隊員がBCで休養、および、BCの撤収の準備。
- 9月10日 BCから第2テント地へ下山。
- 9月11日、9月12日 第2テント地から Pinchimik へ下山。
- 9月13日 Pinchimik からジープやトラックに分乗して Leh へ帰着。
- 9月14日、9月15日 Leh 滞在。この両日、ITBP はじめ関係各所に登山の報告とお礼を行った。また、ITBF(インド・チベット国境警備隊)の歓迎パーティー、Leh 市内の車によるパレード、ITBP の歓迎祝賀会と、朝から晩まで、歓迎とお祝いせめの2日間あった。
- 9月16日、9月17日 Leh から Kargil 経由で陸路、Srinagar 帰着。ただし、Hukam Singh 隊長、徳島は、空路、Srinagar 帰着。

Delhi 帰着、そして、日本へ

- 9月18日 深夜、沖、London より New Delhi 帰着。隊員は、Srinagar 滞在。
- 9月19日 午後、Hukam Singh 隊長と徳島が New Delhi に帰着。
- 9月20日 午後、岡本、峯本、インド隊員全員が Srinagar から Jammu 経由の夜行列車で、New Delhi 帰着。Hukam Singh 隊長、Phu Dorjee、沖隊長、岡本、徳島、峯本は日本大使館に、お礼と New Delhi 帰着の挨拶を行った。
- 9月21日 午後、IMF 総裁 H.C.Sarin の自宅を訪問し、登山の報告を行い、また、お礼を述べた。午後5時から午後7時頃まで、Vigyan Bhavan で ITBP 主催による、歓迎・報告会が開催された。S.B.Chavan 内務大臣、R.D.Sinha 内務閣外大臣、A.M.Khan 工業・企業大臣、IMF 代表 N.D.Jayar 氏をはじめ山岳関係者、報道関係者など約100人が出席した。Chavan 内務大臣より記念の楯が全隊員に贈られた。この様子は、その夜のテレビニュースや次の日の新聞各紙で報道された。
- 9月22日 反省会、および、隊荷の整理の準備などを行った。
- 9月23日 午前8時から午前9時頃まで、Rajiv Gandhi 首相に挨拶と登山の報告を行った。「登頂おめでとう。また、登山にきてください」とのお言葉をいただいた。午前9時頃より夕方まで、隊員で手分けして、IMF で隊荷の整理、ITBP で費用の精算、帰国のフライトの予約などを忙しく行った。午後7時より午後11時まで、Hukam Singh 隊長宅、および、Hyatt Regency ホテルの中国料理のレストラン「Pearl」で、HAJ 主催のお礼のパーティーを開いた。IMFをはじめ山岳関係者、インド側全隊員など40人が出席した。
- 9月24日 沖、岡本、徳島は、Hukam Singh 隊長と峯本の見送りを受け、午後1時30分のAI機で、ボンベイ 乗り換えで帰国の途に着いた。峯本は残務整理や今後のヒマラヤ登山の調査のため、インドにとどまった。
- 9月25日 13時過ぎ、沖隊長、岡本、徳島、成田帰着。峯本は、ガンゴトリ 方面の探査後、11月3日、帰国。



▲ガンジー首相、ITBP 司令官、登山隊員、首相官邸にて

地域ニュース

《中国》

ウルグ・ムズターグ峰に初登頂 中米合同登山隊

中部崑崙の最高峰ウルグ・ムズターグ峰(6,973 m)に挑んでいた中米合同登山隊は、10月21日午後7時27分(北京時間)、同峰の初登頂に成功した。登頂者はいずれも中国側隊員で、胡峰嶺(シボ族)、張保華、アルダシ(カザフ族)、マムト(ウィグル族)、鄔前星の5名。引続き第2次、第3次アタック隊も頂上に向うと伝えられている。

一方、同隊の地質専門家は、同峰地区の科学調査で厚い炭層、鉄や銅の鉱石、大量の植物化石を発見した。

炭層は厚さ38.5mで、地面に露出している部分もあり、炭層の近くには葉と茎が明瞭で保存状態の完全な植物の化石が大量に分布していたのが発見された。専門家は、この炭層と植物化石の発見は、ウルグ・ムズターグ峰地区の古気候、古地理、崑崙山脈の隆起の研究に光を当てるものになったと見ている。

炭層と植物化石が分布する地点の上端から、平均鉄含有量40%の赤鉄鉱が、またウルグ・ムズターグ峰東側の瞭望峰から銅含有量0.5%から0.8%の斑銅鉱が発見された。この斑銅鉱は中国で発見された中ではかなり高品位のものと云われる。

ウルグ・ムズターグ峰(木孜塔格峰)は別名烏拉格(ウルグ)と云われ、中国の蔵北(チベット北部)高原と新疆阿爾全(アルチン)山自然保護区が境を接する地点に位置し、北に新疆ウィグル自治区チャルキリク県、チェモ県があり、南にチベット自治区バンガ県、シェンザ県を臨み、新疆・チベット両自治区の分水嶺であり、崑崙山脈東端の最高峰でもある。

木孜塔格、烏拉格ともウィグル語で、前者は「氷の山」を、後者は「偉大」を意味する。高山が大量の水と雪の気流をさえ切っているため、木孜塔

格峰はその地域の現代氷河作用の中心になっており、現代氷河の面積は700平方キロ、最長氷河は18キロ、氷の厚さは300メートル前後に達する。巨大な天然の固体貯水池は河川の水源となり、タクラマカン砂漠南縁の且末オアシスを潤すチャルチャン河の水源は、木孜塔格峰北西の氷の斜面である。

木孜塔格峰周辺の1,200平方キロの範囲には、標高6,000mから6,400mの峰が54座あり、内外学者、登山家、探検家の憧れの地となっている。然し、ここを中心にした縦横数百キロは無人地帯で、交通は全く無く、気象条件も劣悪であるため、雄大な山峰はこれまで登頂されたことがなく、この地域の地質、水文、氷河に関する資料は長い間未知のままであった。史書によると、1876年に初めてアルチン山へ向うルートが発見され、1893年には木孜塔格峰から100キロ離れた高原で阿其克(アクチ)湖と云う不凍湖が発見されたと云われる。このあと入山する人々は続いたものの、木孜塔格峰の登頂に成功した人はいなかった。

この秘峰の神秘のベールをはぐため、昨夏、新疆登山協会と中国科学院新疆分院は2回にわたって木孜塔格峰地区の偵察を行い、この一帯の地形・気象の特徴・入山ルートなどの資料を大量に入手し、今回の中米合同登山隊の登頂とこの地域での科学調査に大いに役立った。

(10月25日 中国通信)

「シルクロード」旅行団、中国入り

シルクロード2100年を記念する「シルクロード」旅行団が15日夜、中国西部国境の町コルガスに到着した。

旅行団は、英・米・仏3ヶ国の学者と観光客の125人から編成され、秦の始皇帝、漢の武帝、張騫、玄奘三蔵の4つの調査班に分かれている。

この記念活動は、英国の旅行会社ジュールス・ベルン社が企画したもので、英、中、ソ3国首脳およびデクエヤル国連事務総長の支持を得ている。

一行は、9月15日特急列車に乗ってロンドンを出発し、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、トルコ、フランス、ソ連を通過してきた。

旅行団は新疆に入ったあと、旧「シルクロード」北海沿いに東へ向かい、イリ、石河子、ウルムチを遊覧したあと、ウルムチ鉄道局仕立ての専用観光特急に乗り、「シルクロード」の起点西安へ向かう。途中、トルファン、敦煌、嘉峪関、蘭州などを遊覧、調査する。

(10月21日 中国通信)

青蔵高原で大雪と寒波

中国西部の青蔵高原では、今月中旬からの記録的大雪と氷点下39度と云う異常寒波により、約3万人の人々と200万頭の動物が影響を受け、解放軍の空軍機が29日までに9万平方キロの範囲の119の地点に116トンの食料、医薬品、燃料、飼料を投下した。

今月中旬以来、北緯32～36度、東経82～100度を範囲とする青蔵高原の一部に大雪が降り、標高4,600m地点の測候所での積雪は40cm～50cm、ところによっては1mにも達した。また、気温もこれまでの記録よりさらに5.2度低い氷点下39度を記録した。

この大雪と異常寒波のため、交通は途絶し、牧草が埋り、燃料不足により放畜民は手持ちの家具や鞍まで燃やし、牛や羊が餓死し始めている。

中央の関係当局は非常事態の早い段階から救援活動に入り、解放軍に救援協力を命令した。

青海省の唐古拉(タングラ)山地では、10月17日から19日にかけて、この時期としては30年来未曾有の大雪が降り、牧畜民800人余りが孤立化し、9万頭の家畜が危機に瀕した。

雪は連続32時間にわたって降り続き、積雪は55cmに達し、雪が上がった後の気温は氷点下24度にまで下がった。

チベット自治区北部の草原地帯も17日から豪雪に見舞われ、安多県多瑪区ではチベット族牧畜民4,000人余り、家畜40万頭が孤立した。そのため人民解放軍や政府のトラックが救済物資を被災地に輸送している。

(11月5日 中国通信)

《インド》

中印政府間会談開催

第6回中印政府間会談が、11月4日からニューデリーで開催された。4日午後全体会議が開かれたのに続き、5日は国境問題、文化交流、科学技術協力などの分科会が開かれた。

中国政府代表団(劉述卿外務次官団長)は、その後、6日から8日まで中央政府直轄地のゴアを訪問し、会談は9日に再開され、11月に終了した。

インド側団長のベンカテスワラン外務次官は、中国代表団のために開いた夕食会で「相互理解、友好協力の再構築のため努力することは両国の義務であり、今回の会談の目的は両国関係確立の強固な基盤を固めることにある。」と述べた。

これに答えて劉次官は、「中国政府はインドとの良好な関係の発展を非常に重視している。双方が全体の利益を考慮して、現実的かつ理性的態度で、友好的協議、相互理解、相互融通の精神で臨む限り、国境問題の解決は難しくはないと確信する。」と述べ、両国高官とも国境紛争の解決を探り、関係を改善する決意であることを確認した。

1985年インドヒマラヤ

インド登山財団(IMF)によれば、今年、インドヒマラヤを目指した登山隊は、外国隊が61隊、インド隊が86隊の合計147隊で、昨年の登山隊数を上回った。外国隊のうち16隊が日本、以下イギリスが11隊、フランスが8隊、西ドイツが8隊を占めた。

これらの登山隊を地域別に見てみると、U・P州が81隊、H・P州が34隊、J & K州が32隊となり、相変らずガンゴトリ氷河周辺の人気は高い。

遭難事故は3件発生。テレィ・サガール、ケダルナート、サセル・カンリと全て日本隊で起り、日本人2名、インド人1名が死亡した。

昨年よりオープンとなったインド領カラコルムには2隊の合同隊が入り、2つの7,000m峰が初登頂された。

インフォメーション

第7回インドヒマラヤ会議

恒例のインドヒマラヤ会議を下記の通り開催します。講師にはインド登山財団(IMF)副総裁のN. D. ジャイアル氏を予定しております。その他1985年にインドヒマラヤ登山を実施された隊の方にも出席していただき、新しい現地情報を提供して貰います。

また、事故対策の面では、隊長等一人だけが知っていても役に立たない事が多いため、隊から数名の方が参加される事を希望します。

記

- 1.日 時 1986年1月11日(土) 13時~21時
12日(日) 9時~12時
- 2.場 所 目黒さつき会館
(国電山の手線、目黒駅下車徒歩5分)
- 3.内 容—11日(土)—
- 1) 1985年インドヒマラヤ総括
 - 2) 許可取得から出発までの問題点
 - 3) 現地情報

- 4) 質疑応答
 - 5) 講演「インドヒマラヤについて」
- 12日(日)—
- 1) 1985年登山隊報告
 - 2) 事故対策と処理
- 4.会 費 7,000円(1泊2日食代含む。但し、懇親会費は別途いただきます。)
- 5.定 員 40名(申込み順。但し1隊3名迄)
- 6.申込み HAJ事務局
- 7.締切り 12月25日

東京集会・事務局忘年会

12月の東京集会は、事務局忘年会を兼ねて行ないます。丑年を振り返り、寅年の夢を語りあいたいと思います。多数御参集下さい。

日 時 12月26日(木) p.m. 6:30~

場 所 HAJルーム

尚、事務局の年末年始業務は、下記の通りです。

御用納め 12月27日(金)

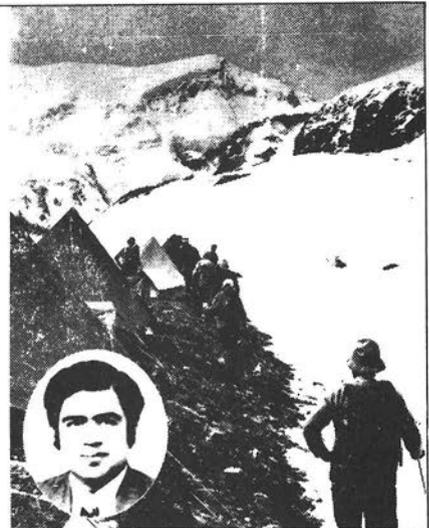
仕事初め 1月6日(月)

Shikhar Travels

シカール・トラベル

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール……
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん!
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)



Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

209, COMPETENT HOUSE,
F-14, MIDDLE CIRCLE,
CONNAUGHT CIRCUS,
NEW DELHI 110 001.

TEL: 331-2444, 2666
TELEX: 031 - 4361
SHIK IN
CABLE: SHIKHE.

秘峰ギャラ・ペリ偵察

1985



▲ツァンポーの渡河には、50年前と同じ渡し舟が使われていた。

〔はじめに〕

—ヤル・ツァンポー河は世界で最も山岳重畳とした困難で荒涼たる地帯を縫って、南チベットの最も開けた地方をぬけて真東に流れている。—これは「ヒマラヤの謎の河」の一節である。ヤル・ツァンポー河は、今や「謎の河」ではなくなったが、大湾曲部だけは依然として「謎」である。その大湾曲部に、この大河「ヤル・ツァンポー」を挟んで二つの注目すべき未踏の高峰がある。南にナムチャ・バルワ、北にギャラ・ペリである。ナムチャ・バルワは既に中国隊が二度にわたり登頂を試みたものの、現在もその頂を明け渡していない。そして、もう一つのギャラ・ペリは、試登はおろか写真すらほとんどないのである。

HAJでは、国内の他会との合同で来年に登山隊を派遣すべく許可を取得した。ギャラ・ペリは、チベット解放後はじめて登山者を受け入れることになったのである。今回の偵察は4人で実施する計画であったが他会の都合により、HAJのメンバー2名によってその西面側が探られた。以下はその概要報告である。

〔北面・東面を断念する〕

9月10日、東京を発った三浦と私は、北京、成都と飛行機を乗り継ぎ12日にラサに入った。成都からの機内では、ナムチャ、ギャラの両峰の雄姿

を充分に見ることができ心は早やくもヤル・ツァンポーへと飛んだ。ところが登山協会からの迎えが来ない。止むを得ず市内行きのバスに乗って行くと車が長蛇の列に作って止っていた。事故らしいとの話が伝わり、先頭まで行ってみると、その事故車は我々を迎えに来た登山協会のパジェロであった。パジェロの左側ドアはトラクターの車体に張り付き運転者は即死であった。

最初から縁起の良くない出だしであったが、ラサでの準備を終えて15日には林芝へ向った。ラサから東へ約150km行くと標高約5,000mのメラ峠を越える。この峠の周辺にはヤクを追う遊牧の民がいた。峠を一気に下り清流が目につきはじけると、標高約3,300m付近から大きな木が目立つようになり、行き交うトラックもほとんどが木材を積んでいる。ラサから8時間ほどで「八一鎮」に到着した。風が強く砂塵が舞う中、体育学校の宿舎に入る。チベットの登山協会はもともとこの地にあつたらしい。北京の許競先生の指導の下にラサの貢布先生らもこの学校の建設に携わったとのことである。

翌日は林芝に向かった。八一鎮から車で20分も行くと、この地方の中心地である「林芝」である。ここでギャラペリ北面や東面の情報を集めていると、驚いたことにその内の一人が、ノイスが編集

した「World Atlas of Mountaineering」に載っているギャラペリの写真と全く同一のものを持って来た。聞けば1983年2月に自分が撮ったものと云う。勇躍東面をめざして林芝を後にし、「東久」へと向かう。途中4,700mの峠を越えて、アルプス風の谷「ルナング」を経て、北面の村である東久に着く。既に標高は2,570mまで下がっている。

打合わせでは、我々が目指す北面は全く人が入っていないこと。東面は「門仲」までは行けるが、荷を運ぶ人を集めるのに4日間必要。キャラバンは道を切り拓いて、はいつくばって往復10日間必要であること。来年の本隊時でもポーターは30名位集めることはできる。等々、偵察期間の短い我隊にとっては誠に残酷な状況であった。ここでも再度東面の写真を見せられ、心は早やくもその姿に引きつけられてはいるものの、偵察隊の任務と来年本隊時の状況を考えると、到底東面に入ることは不可能（4人であれば何とか分散できたノと後悔する）と判断し、東面行を断念した。

〔汎からBHまで〕

東久から再び八一鎮に戻った我々は、17日小雨の中を「汎」に向かった。公安局でヤル・ツァンポー河の橋を渡る許可書をもらい南へ下る。1時間ほどでヤル・ツァンポー河を渡り更に上流に向かい、汎を所轄している「米林」に行く。これは、汎付近で馬やポーターを手配するためには、県の

承認が必要なためである。松林や白樺の続く素晴らしい道を行くと、この付近ではとてつもなく美しい米林となる。チンコー酒を一杯飲んで、汎へ向かう。ヤル・ツァンポー右岸の道は下流に進むにしたがって徐々に細くなり、右側から幾本もの川が合流し、水流の浅瀬を探しながら、ジープとトラックは走る。

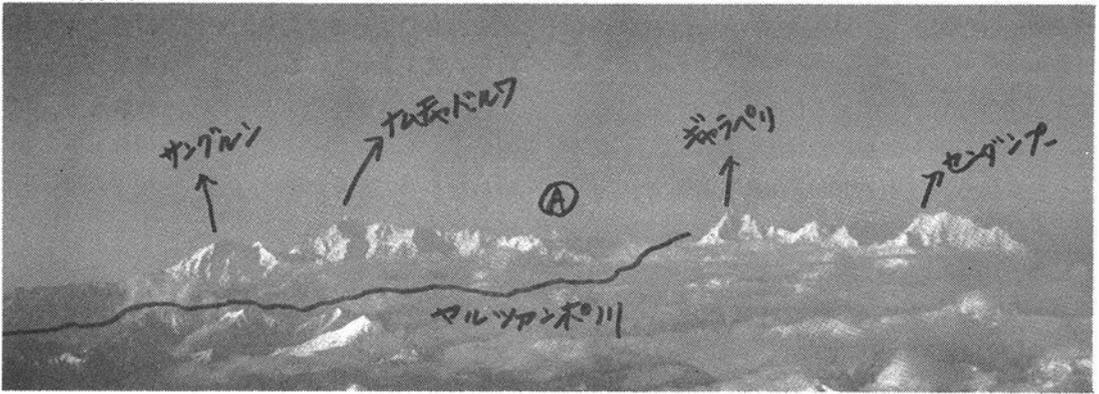
八一鎮から150kmほどで汎（ペ）に到着。汎でこの地区の責任者に偵察の目的を話し、協力を依頼する。この先「大渡卡」で左岸に渡る舟があるとのことなので出発する。道はかろうじてあるような場所であるが、「ニディン」の部落まで行くとは全く渡河できるような水量ではなく「ペ」で渡らなければならないノとのこと。我々は結局彼等の「塩」を運ぶために来たようなものであった。

再び汎に戻り前後策を協議する。結局明日この汎区の幹部と一緒に左岸に渡り、馬やポーターの手配をすることになる。中国登山では通訳の占める比重は大きい。連絡官と通訳と隊長がうまく連携をとれる状態でないと行く先々で不都合が生じる。今回の通訳は、21歳の大学生であるが私達とは馬が合った。連絡官はチベット人であるが、チョモランマから下山したばかりなのと、連絡官としては初めての隊であるため、少々とまどいがあったようだ。酒の大好きな人である。

9月18日、昨夜は満天の星空だったので好天を期待したが本日もどんよりとした空で今にも降り



▼飛行機からのパノラマ



出しそうである。10時にはヤル・ツァンポー河岸に行き舟を待つ。向こう岸に舟が二隻見えるが、なかなか来ない。2時間待ってようやく舟が来た。馬や自転車が乗っている舟は、丸木舟を2つ横につないだ簡単なものであった。12人と約500kgほどの荷を乗せて10分間ほどで左岸に渡った。

連絡官とベの幹部が村へ馬を呼びに行った。結局彼等が帰って来たのは5時間後であった。4頭建ての馬車に荷を積み、ジープ一台は通れそうな道を1時間ほど行くと「ティンベ」村であった。猫の額ほどの草地にテントを張り、夕食をしながら、村の幹部達と話し合う。

ここで判ったことは、①この地方は定量経済なので人（ポーター）を集めるのは困難。②人は荷を担いでも15kg。③人を集めるのには通知を出すために時間がかかる。④ギャラ・ペリとは呼ばな

いで普通は「ギャラツェドン」と呼ぶ。⑤途中から馬は使えず人が運ぶ。⑥道がないのでガイドを連れて行く。彼はギャラツェドンの近くまで行ったことがある。

9月20日、11時過ぎに馬が10頭来た。落葉樹の中をのんびりと進み、途中スースンの部落を経て15時過ぎ本日の泊り場タリンに到着。標高約3,000m。我々のポーターにインドへ逃げてビルクッパに25年いたチベット人がいた。母親がスースンにいて年老いているため、カトマンズ～ザンムー経由で2年前に戻って来たと話す。母親が死んだら再びインドへ戻りたいとのことであった。ラサの博物館には、インドから舞い戻った人々の統計があったが実態はどうなのだろうか。

21日、昨夜から12時間雨であった。ここで荷物が多すぎて運べない（人がいない）と申し入れが



▲BC付近からのナムチャ・バルワ主峰北面

あり食糧を中心に荷をデポした。(BHから取りに来る約束)13時半馬で出発。15時半チュベでキャンプとなる。一軒だけ家があり多分左岸では、ここが最後の人家である。

22日、久し振りに雨が降らない朝であった。ヤル・ツァンポー河は、ナムチャ・バルワとギャラ・ペリの支尾根によって曲がり曲っている。10時40分に出発し、雑木の多くなった踏み跡を探しながら進み、15時キャンプ地着。完全に林の中である。夕方木々の間からようやくギャラ・ペリの雄姿を垣間見ることができた。下部の岩壁が異様に強調されて見える。

23日、朝8時で8℃標高2,810m。9時30分出发。踏跡が完全になくなり、鈍目を頼りに雑木を払いながらの前進である。沢に出合えば立木を倒しての橋作りで1時間はかかる。昼は2時間お茶を湧してじっくり休む。歩けば15分で30分休む。これの繰り返して背負っている隊荷は15kg。泣けてくるキャラバンである。ポーターの焚火の煙に刺激されて、上の岩壁にある巣から大型のハチが飛んで来て大騒ぎだ。連絡官やコックも顔や頭を刺された様子。16時過ぎギャラの対岸付近のカルカでキャンプ。

24日、昨日はキャンプ地に着いてからポーター側から様々な要求があった。①ここまで道が悪く疲れたので明日は休み、②明日行くなら1日分給料をくれ、今日はBHに着くとかで意外に早く9時過ぎに出発したが、結局は15時50分水のある沢に出た所でキャンプ(20時迄明るいですよ)

25日、相変わらずの雨。相変わらずの要求。面倒くさいので10時過ぎに一言“行こう”と言いテントをたたむ。11時40分出发。自分の荷物をデポしたりして、今日は本当にBHに着くつもりらしい。雑木も激しくなり伐採しながら進み16時沢に出る。橋を架けている内に、「ここまでの約束なので帰る」と云う。止むを得ず、下に見える河原をBHとする事にしてそこまで荷を運

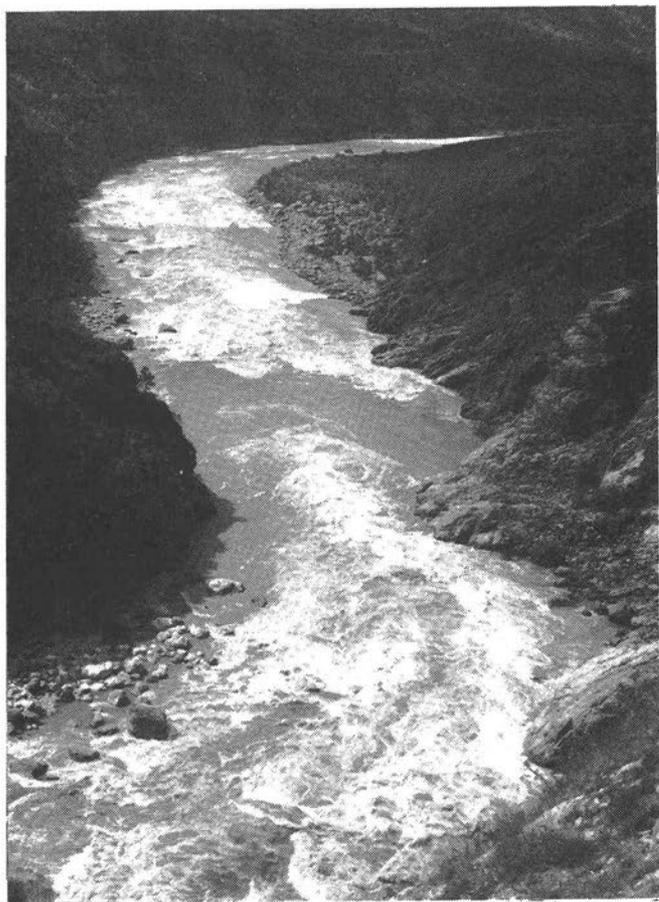
ばせる。連絡官の説明では4人を残してデポした荷物の荷上げに従事させると云うので了承した。

〔偵察活動〕

BHで休養をとった後27日には、連絡官、コック、通訳の5人で上部のルート偵察に向った。踏跡がある雑木と竹林を過ぎると、突然シダ類の密生する広場となる。ここは大きな獣が遊んだと思われる跡があり気持ちが悪い。あちこちと迷いながら獣道を拾いながらようやく、下の河原が見える所まで出る。ところがここから河床へ降りるためには、背丈が2~3m位あるトゲの木の密生した林を切り拓らなければならなかった。

翌日からルート整備と荷上げを2人で行う。この頃、対岸のギャラ村から猟師が4人と犬が8頭登ってきた。熊を撃ちに来たと恐い事を言う。通訳は、我々が上部に行っている間に猟師が子熊を担いで来たと報告。

9月30日に10日間分の食糧を持って2人で上部



▲ヤル・ツァンポー河の流れ

へ移動した。更に氷河上約3,550mに今回のBCを設営した10月2日には、天候は完全に好天に向かい偵察期間中持続すると云う幸運に恵まれた。

10月8日には、充分とはいかないにしても、一通りの登路偵察を終えてBHに帰幕した。

ギャラ・ペリ西面に喰い込む氷河〔仮称・ギャラ・ペリ氷河〕は氷河としての規模は小さい。この氷河は、ギャラ・ペリ西峰（双耳峰である）から西に延びる稜線を経てセンダンブー（6,309mとなっているが、空から見た印象などを加味してギャラ・ペリより300～400m程度しか低くないのではないかと思う）となり、更にセンダンブーから南東に延びる稜線と、ギャラ・ペリ主峰の途中から南に延びる稜線に囲まれ、馬蹄形状を成している。主氷河の中央部の幅をロープで測ってみたら約300mであった。

ギャラ・ペリ西面は、双耳峰となる主峰南稜と西峰にかけて傾斜の強い岩壁層を形造っている。この中に何本かの稜があるが、ルートとしては、主峰南稜上に突き上げる2本を予定ルートとして偵察した。南稜上に出た所からは忠実に南稜を辿り頂上直下で西峰へ続く稜線に出て頂上へ至ることになるだろう。

センダンブー峰については、空から見ても大き

な山と云う印象であったが、実際にその下に立ってみても、ギャラ・ペリと800m低い山とは到底信じられないほど立派な山姿であった。特にその南東面は純白な雪一色であった。登攀に価する山と云えるだろう。

ナムチャ・バルワ峰北面についても触れなければならないだろう。頂上から北西面に長大な尾根が出ているが、この稜線上には立派なピークが4つほど見られた。主峰は西面側から見た頂上岩壁が立派な三角錐であるのと同様に北面側も三角錐状となっている。北面側には大きな氷河が見られるが、残念ながらペマコウチュンまで隊荷を輸送するために空輸以外には考えられず、現状では北面からの登山は困難であろう。

〔BC からラサまで〕

好天気 of 到来と共に少し樹々も紅葉し始めた10月8日、BCを撤収しBHに下った。9日夕方にはギャラ村から10人（女2人）のポーターがやって来た。翌日には村の対岸まで下り、11日にはヤル・ツァンポー河をイカダで渡りギャラ村に入った。ギャラ村は12家族61人が住んでいる。この河の最奥の部落である。穀物の集積場の広場にテントを張った我々は、見せ物の様なものであった。



▲ギャラ・ペリ西壁
（右手前の稜が第一候補ルート）

10月12日、村の住民の半分位が、村はずれまで我々を見送ってくれた。対岸の道に比べるとまるで天国の様な道を進む。樹々はすっかり色づき、時折り河床に近づく所では、丁度秋の上高地、徳沢の様な雰囲気である。一ヶ所岩壁帯に道が拓かれており、ここの通過では馬から荷を外し人が運ばなければならなかった。午後4時過ぎ大分県のトレッキング・チーム6人がキャンプしている場所に到着し、我々もテントを張った。

翌日は長い道程となった。途中キイカルの部落の手前から雲の間にナムチャ・バルワが見えた。手の届きそうな所に聳え立つ雄姿に感激する。往路にデポした荷物が結局はBHに上がらなかったため、BHから下山する日から昼食は抜きになっていた。この日は結局出発してから11時間後の20時半に真暗なべに到着した。

10月15日 べの招待所を出発。途中大分隊のキャンプに寄りムツゴロウ先生に逢う。米林県に立寄り副主席等数名の幹部に逢って、来年の登山についての協力を依頼する。翌日は紅葉の一段と美しくなった道进行（ジープのスプリング板が折れて3時間待ちとなったが）少々雪の積った峠を越して、20時50分ラサの招待所に到着した。

〔おわりに〕

ギャラ・ペリ登山を左右する第一の要因は、ヤル・ツァンポー河の水位である。ラサ、八一鎮、林芝、米林、派、その他この左右兩岸の住民達の渡河時期に対する意見は一致しない。今回の偵察の結果から推定して登山時期を決定しなければならないが、年によって当然時期のズレがある事を前提としなければならないだろう。

第二は、ギャラ・ペリ周辺の気候である。基本的にはモンスーン気候ではないか？と考えて見たが、これも甚々資料不足である。雪の来る時期や、積雪量についてもまちまちの回答であったが、11月には南面、西面に雪が到来するようである。

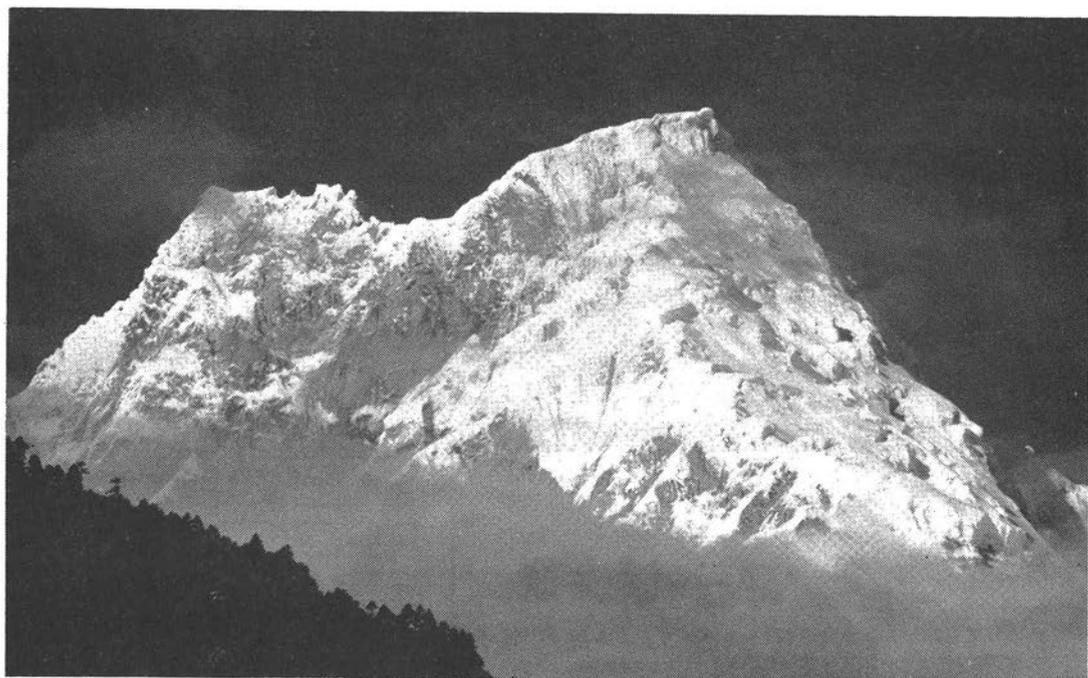
第三は、ポーターである。ネパール、インド、パキスタン等と違って、ポーターは県の命令によって動き、荷を担ぐ習慣がないのである。そして人口が圧倒的に少い。100人のポーターを同時に雇用することは困難である。

その他動物や植物による被害も予想されるが、山自体は四方から可能性のあるルートが頂上へ続いており、登山隊にとっては魅力ある山と言えるだろう。 (山森欣一)

日本ヒマラヤ協会佳拉白里偵察隊

1985. 9. 10 ~ 10. 24 (45日間)

隊長 山森欣一 隊員 三浦敏弘



▲ギャラ・ペリ西面(右が主峰)

寸感

雷龍の国の“玉峰”を断念しての帰路、飛行機の都合でデリーに出たところ、インドの古い友人より思いがけないテンジン・ノルゲイ氏とのディナー・パーティーに招待された。74歳の老境を迎えられたエベレスト・ヒーローは、今なおかくしゃくとされており、翌日はスイスへ飛びたと云われていた。我々が、ブータンの帰りだと知ると、氏のブータン行の想い出を語り聞かせて下さり、次の機会に大きな成功があるようにと、我々を慰めて下さった。

事務局日誌 (11月)

- 1日(金) インド大使館経済担当公使のN.K.シン氏のさよならパーティに出席(インド大使館、尾形)
- 7日(木)～8日(金) 中国・四川登山関係打合わせ(福岡・広島、山森)
- 12日(火) 中国登山協会の史占春副主席と面談(京都、山森)

- 14日(木) 岳人編集部の永田氏来局(ガンクラウン隊のインタビュー)
- 15日(金) ヒマラヤ No.169 発送
- 25日(月) 東京集会(22名)
- 27日(水) JAC高所登山シンポジウムに出席(山森、飛田、尾形、吉田)
- 29日(金) インドのラジブ・ガンジー首相レセプションに出席(稲田)

ヒマラヤNo.170 (1月号)

昭和60年12月10日印刷 61年1月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 尾形 好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

郵便振替 東京0-48954「日本ヒマラヤ協会」

ヒマラヤへのステップ!

エクスペディション & トレッキング

ネパール、インド、パキスタン、

ソ連(中央アジア)へ遠征、

トレッキングを計画の皆様へ。

航空券から登山要請、現地手配、入国査証(ビザ)代介手続き、遠征隊・トレッキング用山岳保険加入に至るまで適切なトータルアドバイス、手配を受けたいまわります。

ヒマラヤ以外にもヨーロッパアルプス、アフリカ、北・南・米etcの格安航空券、情報もあります。

世界山岳旅行クラブ
運輸大臣登録旅行業代理店業第2809号
ホーム登山トレッキング保険代理店

(株)マウンテン・トリップ

〒150 東京都渋谷区恵比寿西1-8-1 かずさやビル3F 303号 ☎03-476-1200 担当 藤原

主催: ㈱ロータリーエアサービス 〒105 東京都港区新橋2-2-4 ☎03-504-0111 担当・佐藤 [一般登録第332号/取扱主任者・伊藤園子]



TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号



カラコルムの秀峰 ウルタル山

遥かなる高み

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

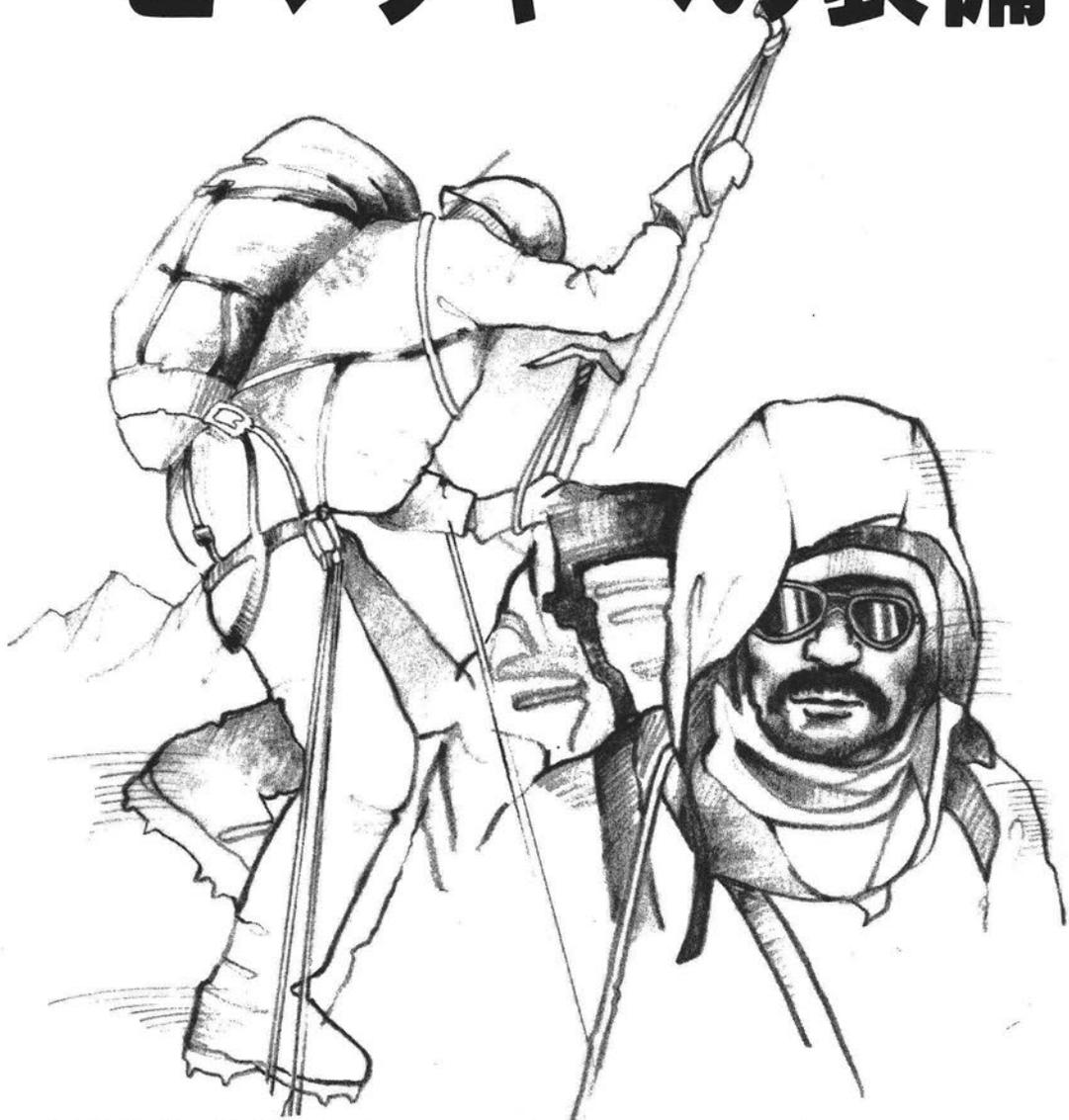
トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017
KATHMANDU, NEPAL ☎216338
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03(208)6601~3
- 新潟店 / 〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252(43)6330
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486(41)5707
- 仙台店 / 〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222(97)2442
- 水道橋登山店 / 〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03(264)5575~6
- 町田ジョルナ店 / 〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427(26)6248(代)
- 神田登山店 / 〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03(295)0622
- フーズショップ / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03(232)1286
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03(346)0301(代)
- 外商部 / 〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03(200)7219
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273(27)2397(代)
- 事務所 / 〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03(200)1004
- 札幌登山店 / 〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011(222)5305